

683

194

海軍航空の概要

海軍省海軍軍事普及部編



0057605-000

683-194

海軍航空の概要

海軍省海軍軍事普及部・編

海軍省海軍軍事普及部

昭和10

AJG

683
194

昭和十年十二月

海軍航空の概要

海軍省海軍軍事普及部

(以印刷代謄寫)

海軍航空の概要正誤表

| 頁 | 行 | 誤 | 正 |
|----|----|----------------------|-------------------------|
| 一二 | 七 | 射出機カタバルト | 射出機(カタバルト) |
| 一三 | 一 | のである、水陸何れに於ても發着共に可能な | ので、水陸何れに於ても發着共に可能なものである |
| 一三 | 四 | 又飛行…… | 「又」削除 |
| 一五 | 九 | それは | これは |
| 四五 | 一〇 | 基地の航空隊は | 基地の航空隊の任務は |
| 五五 | 七 | 艦隊決闘 | 艦隊決戦 |

目次

發行所寄贈本



一、概 要……………(一)

二、海軍用航空機の種類並に任務……………(三)

三、海上及陸上航空隊の航空機配備状況……………(四)

四、海上作戦に於ける航空機の活動……………(五)

五、海軍航空兵力維持方針……………(六)

六、列國海軍航空の現勢……………(七)

七、上海事變に於ける海軍航空部隊の活動につき並結言……………(終)



683-194

海軍航空の概要



説

明治三十六年(西曆一九〇三年)十二月十七日米人ライト兄弟が人類永年の憧れであつた空の征服への第一歩を踏出して以來、僅かに三十年の短時日の間に航空は實に目覚ましき飛躍を遂げたのである。人類最初の飛行が十六馬力の飛行機によつて滯空實

に五十九秒距離僅かに二百六十米であつた事を回顧する時、人智の進歩が何處まで伸展して行くのであらうかに、今更乍ら呆然たらざるを得ない。この進歩が何處まで
特に此の數年間の飛行機の進歩、就中高速化は全く從來のわれらの豫想を裏切るも



發行所 海軍省



のである。昭和八年頃までは飛行機と言へば、精々一時間百五六十哩位のもので、將來如何に發達しても民間機が二百哩時に到達するであらうなどとは誰しもはつきりと期待しては居なかつたことゝ思はれる。只漫然と將來益々發達するであらうと憶測して居た程度であつたと考へる。然るに同年末にはボーイング二四七型續いてダグラスエヤライナー、ノースロップガンマ、ロッキードエレクトラ、ブアルタイ一等續々として優秀旅客機が出現した。最大速力は二百二十哩時に垂んとし、巡航速力は百八十九十哩時に達し所謂 **THERE MILES A MINUTE PLANE** の出現を見るに至つた。而もこれらの飛行機は十二乃至十四の座席を備へ、その旅客設備は快適を競ひ、如何なる意味に於ても決して高速のみを目標とした特殊の飛行機でなく純然たる實用本位の旅客機である點は特筆に値する。此の傾向は益々進展の途上にあつて、軍用機は三百哩時、商用機は二百五十哩時に到達するも近き將來にありと言はれるに至つた。こ

れは昨年の春であつたが、其後の實狀を辿るに決して此の豫想の過大でない事を看取することが出来るのである。

而して此の三十年餘の間に數字的には左の如き驚嘆すべき記録を示すに至つたのである。

| 種別 | 記録 | 年月日 | 記録保持者 | 使用機 |
|-----------------|--------------|------------------|--------------|--------------------------------|
| 速度 | 七〇九・二〇二 時 | 一九三四、一〇、 二三 | 伊アゼルロ | マツキー七二型 ファイヤット二聯 三、〇〇〇馬力 |
| 高度 | 一四、四三三米 | 一九三四、四、二一 | 伊レナト、ドナ チ | カプロニ複葉 ベガサス六〇〇 馬力 |
| 航續時間 (燃料無補給) | 八四時三二分 | 一九三一、五、二五 —二八 | 米ワルターリ ズ | ベランカ單葉 バツカード、 デゼル二二五馬力 |

| | | | | | |
|-------------------|----------------|-----------------|-----------------|---|-----------------------------|
| 航線 (燃料無補給、直線) | 九、一〇四・七軒 | 一九三三、八、五 一七 | 佛 ロッシー及 ゴドス | 同 | 右 |
| 航線 (燃料無補給、周回) | 一〇、六〇一・四 八軒 | 一九三二、三、二三 一六 | 佛 ボストロー及 ツシト | 同 | ブレリオニー〇型 イスパノスイザ五 〇馬力 |
| 航線 (燃料空中補給、周回) | 六五三時三三分 | 一九三五、六、四 一七一 | 米 キー兄弟 | 同 | 小型 單葉機 オレ・ミス |

右の如き飛躍的進歩を成就した主な原因は、之を技術的に云ふならば(一)翼が單葉型となり機體は極力流線型とし且つ飛行中は脚や車輪を胴體の中へ引込む等の手段を講じて前面抵抗を極度に減少し(二)デュラルミン、超デュラルミン等の輕量にしてしかも強度の強い材料を用ひるに至り(三)フラツプ等を使用して離着陸の性能を向上させ(四)可變節プロペラ及過給器が實用化されるに至つたこと等を列舉し得るのである。その結果上層氣流を利用する高々度飛行を効率良く實施し得るに至つた。

とりわけ飛行機の高速度において最も厄介な最大最小の兩速力の差即ちスピード、レンドの問題がフラツプの發達によつて大部分解決されたことが飛行機高速度の重大な要因を成して居るものと考へられる。

又長距離飛行に於ては大西洋上歐米兩大陸間又は太平洋上米本土布哇間の無降着飛行や數年前の米海軍飛行機又は昭和四年のツエツペリン飛行船の世界周航或は屢次の歐洲極東間歐洲濠洲間又は歐洲南阿間等の連絡飛行も行はれ、更に北南兩極の大探險飛行にすら成功し、又伊國飛行艇編隊大西洋横斷飛行や婦人による長距離飛行も行はれ、遂に一九三一年十月米國バンゴボン及ハリソンの太平洋無降着横斷飛行の成功を見、更に昨年は米國海軍で飛行艇六機の米本土布哇間無降着編隊飛行の意義ある成功を見るに至り、本年に入り汎米航空會社はシコルスキー飛行艇を以て太平洋横斷定期航空を開始せんとして數回に亘つて桑港、布哇、ミッドウエー、ウエーキ、ガム

と試飛行を行ひ其の實行性を確認し、愈々十一月初旬より差當り桑港馬尼刺間の郵便物定期航空を開設せんとして居る。

以上は所謂記録的飛行であるが轉じてその實用方面を説いて見よう。實用方面は何と云つても定期航空を推さねばならぬ。我が國においては未だ定期航空の有難さを如何に體得する機會が少ない。滿洲へ旅行する人が飛行機を利用すれば初めてその有難さを泌々感ずるであらうが東京から大阪へ飛行機で空の旅としやれて見ても時間においては飛行場への往復の時間を計算に入れねばならぬからそれ程早いとは思はれない。況んや天候不良のため缺航するやうな時にはそれを非常に遅いものとなる。定期航空には確實性と地域の廣狹とを考慮する必要がある。日本内地に於ては寧ろ夜行列車の方が遙かに早いと云ふことになる。しかしこれは飛行機の實用性が地域の狹隘によつて大いに割引かれるためであつて定期航空の便益は地域の廣狹の二乗に比例するものと謂ひ得よう、従つて北米合衆國の如き廣大なる版圖を有するか英帝國の如く世界到る處に植民地を持つ國なれば定期航空は充分にその驥足を延ばし得るわけである。茲にはかりに米國の例を引いて定期航空の驚異に値する進歩に就て記して見る。

現在米國にはユナイテッド・エヤラインズ、T、W、A、アメリカン・エヤラインズ及び汎米航空會社の主要航空會社がある。これら諸會社の營業狀況を一瞥するにユナイテッド・エヤラインズは飛行哩數に於て米國第一の會社と稱せられて居るが最近の飛行總哩數は七千萬哩（内三千萬哩は夜間飛行）に達して居る。現在年約千五百萬哩の割を以て營業し、其の六五％は全く旅客輸送、残りは郵便飛行を行つて居る。次にT・W・Aであるが、同社は昨年から米大陸横斷夜間飛行を開設した。之は前述のダグラス・エヤライナーの就航に依つて可能となつたものである。夜間飛行西行第一便はスカイ・チーフと呼稱されて居るが、これは午後四時紐育を發し、翌朝七時羅

府に到着（途中三着陸）する。第二便コメットは午後五時三十分紐育を出發翌朝九時十五分羅府に着く。また東行第一便は午後四時、第二便は午後九時それぞれ羅府を出發し、所要時間孰れも十六時間で大西洋岸に到達する。飛行高度は八千乃至一萬四千呎である。尙同社はノースロップ・ガンマに高々度飛行に適する如く最新の改善を加へて、將來高度一萬五千乃至二萬呎の飛行を以て大陸横斷十二時間を目標として、スピードアップを計畫中である。第三に、アメリカン・エヤラインズ（舊アメリカン・エヤウエイズ）は二百五十萬弗を投じてエヤウエイズ時代の舊式機をカーチス・コンドル寢臺附飛行機ダグラス、エヤライナー、ヴァルテイ等の最新機に着々代換中である。此の會社は寢臺附飛行機を就航させた世界最初の會社であつて、目下ダグラス羅府間及び市俄古ネワイク間にこれを使用して居る。最後に、汎米航空會社であるが同社は昨年初めて全拉米諸國に跨る航空路を完全に經營するに至つた。一九三四年一月

より九月迄の運輸量のみで、優に一九三三年の全輸送量を凌駕し、郵便旅客共に全線特に伯亞兩國行の長距離線に於て増加し、就中貨物運搬量は最大の増加率を示してゐる。昨年八月豫て註文中のシコルスキIS四二飛行艇完成するや、同社はこれを華々しくリオデジャネロへ初飛行させ、ブラジリヤン・クリツパなる俗稱を與へて伯亞兩國行東部幹線に就航せしむることゝなつた。尙之と並行してダグラスエヤライナー六機ロツキード・エレクトラ六機の優秀機を北米西部陸上線及南米西部幹線に使用して居る。近く太平洋横斷定期航空路を開設せんとして居ることは前述した通である。翻つて航空機の軍事方面に於ける價值効用に就ては茲に事新らしく申述ぶるまでもなからうが、これこそ眞に戦闘方式の根本的變革を齎らし、もの、平面戦より立體戦へ、前線戦より全國土戦への轉移を將來せしめしものとして戦略上に將又戦術上にその絶大なる作用力を輕視するものは一人も無いやうになつた。今日航空は國軍の必須

不可缺の重要構成分子として極めて大切なる役割を負擔せしめらるゝに至つたのである。

従來は國防問題を考ふるに當り適當なる海上權力なくして國家の安寧を確保する能はなかつたが、此の海上權力は今や海上に於ける適當にして有効なる航空兵力なくしては到底維持し得ざるに至つた。しからば飛行機が將來海上作戰に如何なる影響を及ぼすやと云ふに、未だ海上に於ける實際の航空行動は今尙新奇のものであつて戦例に乏しく何人と雖も何等正確なる回答を與へ得ないであらうが、極めて常識的には次のことだけは明確に云ひ得る。即ち飛行機は水上艦艇をして最も強力なる艦載砲の射距離よりも十倍も大きい遠距離において敵に大打撃を與へ得ること、飛行機を搭載する艦船の視界は之が爲めに十倍も増加すること、飛行機はこれを搭載する艦船をして從來よりも遙かに遠方から魚形水雷を發射し得るに至らしめると同一の結果を生じた

その備砲の有効射距離を著しく増大せしむること、飛行機は射撃艦より全く望見し得ない敵艦に對して有効に射撃を實施せしむること等、數へ來れば一々その煩に耐へぬ程であるが、要するに飛行機は如何なる艦種の艦船に對しても亦如何なる種類の任務に對しても直接にその有効度を増加せしむるに與つて力あり、また立場を異にして考へれば敵の總べての攻撃の有効度を減殺することとなるのである。水上艦艇の戦闘力と飛行機の能力とは互に相關的に増加するものと結論し得る。

本邦一般世人の航空に関する研究、理解は近年著しく深くなつたけれども猶未だ航空を目して極めて危険なる一個の輕業の如くに思ひ込んでゐる者も決して少くないのを見聞するのは遺憾の至である。

以下主として海軍に関する範圍に於て先づ航空器材方面の進歩を略説し、次で海上並に陸上の航空配備及海上作戰に於ける航空機の活動を敘述し轉じて列國海軍航空の

現狀を概説して今日進歩せる航空の輪廓を示すこととする。

(二) 海軍用航空機の種類及任務

(イ) 海軍用飛行機

海軍の使用する飛行機の中、航空母艦に搭載するものは陸上機と同様に車輪を有するもので特にこれを艦上機と呼び、母艦々上の飛行甲板を陸上飛行場の如くに滑走して發艦し又その上に降着する。飛行甲板の無い補助航空母艦や戰艦巡洋艦等に搭載するものは浮舟を備へた水上機を用ひ射出機カタパルトによつて艦上より射出するかまたはデリックによつて水上へ卸して出發させる。降着は一般水上機同様海上に着水させて後艦内に揚收する。水上機を母艦の飛行甲板上に着艦せしむる方法をも考慮して居る國もある。此外水陸兩用機がある。これは水上機又は飛行艇に車輪を併有したも

のである。水陸何れに於ても發着共に可能な、又近頃同一式の機體を水上機としても陸上機としても使用し得るように隨時迅速簡單に車輪と浮舟とを換裝し得る様にしたもの、即ち水陸互換式の飛行機も相當使はれてゐる。

又飛行艇は翼を有するポートである。最近の飛行艇は極めて大型となり飛行艇にポートをつけたと云ふよりもポートに翼をつけたものと云ふ方が正しい。これは主として陸岸を基地として遠く高海上に活躍するものである。海軍の陸上航空隊にはこの飛行艇の外水上機も陸上機も使用する。

次に軍用飛行機は夫れ夫れ軍事上の各種の任務に應じ、これに適するよう特殊の性能を賦與せられるのであるが、この任務の方面から見れば戰闘機、偵察機、攻撃機(雷爆撃機)練習機とに分けられる。

但し以上の各種別は夫れ夫れ他の任務を兼ねるものが少くない、例へば戰闘兼偵察

機、攻撃兼偵察機といふが如くである。尙國によつてはその國情に従つてその呼び方も異つてゐる。以下各機種に就いてその性能任務等に關して述べることにする。

(1) 「戦闘機」 戦闘機の主任務は空中戦闘である。即ち敵機を撃墜して空間に敵影なからしめ制空の實を擧げんことを目的とするものである。戦闘機は味方艦隊の上空を警戒して來襲する敵機を邀撃し、或は味方の偵察攻撃諸飛行隊を掩護して敵機の拒止を撃攘することもあり、或は又敵艦々上に急降下して機銃彈を雨注し、或は輕爆彈を以て敵艦の上部構造物や潜水艦等を破壊することもある。故に戦闘機はその任務上性能最も輕快駿速にしてあらゆる激烈なる空中操作に堪へ得るようにならねばならぬ。機體は特に堅牢なるを要する。従つて形態も一般に小さく單座のものが多くこれに強馬力の發動機を裝備する。極度の性能を必要とする關係上發動機は現今の優秀機では七〇〇乃至九〇〇馬力級のものが使用せらるるに至り而もみな過給器（スーパーチャージャー）を裝

備して居るから三、〇〇〇米乃至四、〇〇〇米迄性能を低下せず寧ろかゝる高度で最大速力を發揮するように設計されてゐる。此の機種に屬する列國の代表機は英國のブルストル・ブルドック、ホーカー・ニムロッド及びホーカー・フュリー、米國のカーチス・ホーク、ボーイング等であり我が國にも之に匹敵する海軍の九〇式艦上戦闘機陸軍の九一式及び九二式戦闘機がある。最新のものはその最大速力は四〇〇〇浬時を超え上昇力は高度三、〇〇〇米に昇るのに四分内外である。戦闘機は海軍では主として艦上で使ふのであるから飛行機の各部に對して種々の要求があり、これらを満足せしめるため多少性能の低下は免れない。

それは航空母艦に搭載する飛行機は戦闘機でも後に述べる攻撃機でも艦上發着を容易ならしめるといふことに特に考慮を拂はねばならぬからである。従つて操縦者の視界を出来るだけ廣くし、且艦上操作の無理に耐える強度を必要とし又特に着艦速度を

出来る丈け小にするため速力範圍を充分大にする必要がある。これが爲め純然たる陸上の戦闘機に比して設計上特別の考慮を要するのである。戦闘機の主兵装は勿論空中戦闘用の機銃である。單座機はプロペラの翅の回轉のすき間を通して前方を射撃する固定銃二挺乃至それ以上を裝備し、自由自在に自己の飛行機を操縦して敵機の弱點たる死射界へ死射界へと突進し有效なる猛射を加へるのである。戦闘機は現在單座のものが多いが復座機として後方射手は旋回銃によつて後方より近迫する敵機を撃墜するものを可とする意見もあり戦闘機の單座複座乃至多座式の優秀問題は從來幾多の論議を加へられて居るものである。

多座戦闘機は以前から佛國で研究されて居るものであるが最近此の種戦闘機の優秀なものもが制式機として採用されて居る。これは普通三座以上で機銃も固定機銃の他に旋回銃座を三乃至五個も設けてあつて、これが編隊飛行を行ふときは所謂火網なるも

のを構成する。重量や形態は相當大きなものであつて従つて性能や運動性は單座または復座戦闘機に比較して遙かに劣るが銃火の効力は相當大きなものであることは勿論である。

尙戦闘機には大口徑機銃所謂カノン附戦闘機なるものが最近再び現はれて來た。これは歐洲大戰末期に夫の名飛行家フォンクやギヌメール等に依つて用ひられたもので一時姿を潜めて居たが近頃佛國その他にカノンの附いた優秀戦闘機が一部に用いられるようになった。

(2) 「偵察機」 偵察機の任務は極めて廣汎である。或は艦隊前路の哨戒潜水艦に對する警戒或は彈着や敵艦の針路速力等の觀測、魚雷機雷に對する見張、或は艦隊在泊中の港灣泊地の警戒や或はまた遠く敵艦隊や陸上の搜索偵察等數ふるに暇もない程であるが、之等は搭乗員の優秀なる戦術眼と共に遠方まで到達し得る通信力に俟たねばな

らぬ。故に偵察機は多く複座又は三座であり従つて前項の戦闘機に比すれば素より形態も大となり爲めに速力、上昇力等の性能も戦闘機の如き軽快駿速を求め難い。然しながら敵戦闘機の來襲を撃攘して本務の達成に遺憾なからしめるには自然出來得る限り性能の優秀を圖ることになるのであるが、近時要する場合戦闘機の任務をも有効に果し得る如くした偵察兼戦闘機とでもいふべきもの多々出現して居る。従つてこれらは大抵複座である。前項既述の複座戦闘機は一面この偵察兼戦闘機又は戦闘兼偵察機としての要求に合致するものであり、兩者互に相接近して結局一型式を生み出す様になりつゝある。それは兎も角として一般に偵察機の任務は前に述べた如くであるから空中戦そのものは副であり従であるが必要なる戦闘力は備えてなければならぬ。これが爲めには普通旋回式聯裝機銃を偵察者席に備へ、主として後方より近迫する敵機の撃攘に用ひ、又後下方より來襲する敵機に對する爲め胴體の内部より下方へ射ち出す

様にした銃を併せ裝備するものもある。偵察機は本來の任務の偵察以外に煙幕を展張することもあり、或は比較的小型の爆弾を搭載して爆撃を敢行することも少くない。今日航空母艦以外の艦船にはこの偵察機を水上機として搭載するのが各國一般である。偵察機には水陸互換式のもの或は亦水陸兩用機の型式のものを用ひてゐる國もある。

今日偵察機は約四五〇馬力乃至六〇〇馬力附近のものが多くその性能も優秀なものは速力三四〇浬時に及び上昇も千五百米へ約三分にて到達し、上昇限度八千米以上に及ぶものがある。最新式の戦闘機以外は到底かくの如き新偵察機に及ばざる状態にあるのである。又一方に於て潜水艦に搭載する偵察機の如きは一〇〇馬力前後の小型のものもある。

此の種に屬する列國の優秀機は英のフェアリ・シール米のポート・コルセヤ及びカ
ーチス、我が國の九〇式二號水上偵察機等がある。

(3) 「攻撃機」(雷爆兼偵察機) 攻撃機は爆弾や魚雷等で敵艦や要塞等を攻撃する所謂爆撃機雷撃機である。而してこの爆撃機雷撃機は夫れ夫れ別個に専用機とするものも絶無ではなく寧ろ將來或はかくの如く特に専用のもので出来るかも知れないが、今日の所では兩者同一機を用ひ、所要の場合爆撃機とし又雷撃機とするのが一般である。攻撃機は一般に多量の爆弾等を搭載し得んが爲めに極めて大なる搭載力を要求せられる。現在各國空軍が使つて居る所謂重爆例へば我が陸軍の八七式、英のハンドレーベリジ、獨のユンカーG三八。伊のカプロニ等は略々同程度のもので總重量約六、〇〇〇乃至八、〇〇〇疋、全馬力約一、〇〇〇、最高速力約二二〇乃至二四〇杼時程度で主として夜陰に乗じて敵國または敵軍の重要基地を爆破する戰略的目的に使用される關係上、航續距離竝に携行爆弾は相當に大きくなければならぬ。

しかし乍らこれらは陸上用であつて海軍用の攻撃機は艦内に收納し、艦上に於て取扱といふ點から無制限に大きなものは用ひられない。今日艦上攻撃機としては各國先づ六七百馬力またはそれ以上の複葉單發動機式が多く、爆弾は五六百疋魚雷は八百疋程度のものを携行して四時間位行動し得るものが多い。中には單葉雙發動機式のものもないではない。

今日各國の艦上攻撃機には約三〇〇杼時の速力、三千米約一〇分の上昇力、上昇限度約六千米に達するもの決して稀ではない。これ敵艦隊襲撃に當つては爆弾携行量を大きくすると共に、一方に於ては出來得る限り輕快駿速を保持し以て襲撃の効果を最大に發揮すると共に、他方敵機または敵艦高角銃砲より受ける損害を少くするの要があるからである。その航續力は最近減少の傾向がある。

攻撃機の爆弾又は魚雷の搭載量と航續力との間には眞に密接な關係がある。飛行機自體の有効搭載量は元來一定のものである以上遠距離に行動する爲めに多量の燃料を

搭載するときは自然爆弾等に充當し得る分量が減じて来る。反對に爆弾を減じて特設燃料槽を附しこれに多量の燃料を満たして遠距離偵察機とすることが出来る。これが攻撃機は一面偵察機兼用として用ひられるわけである。時に雷爆撃兼偵察機といひ又は三任務機と呼ばれるのもかういふ用法からである。

我が海軍の一三式、八九式及び九二式艦上攻撃機、英國のブラックパン・ピツカー、ス米國のマルティン等が之に屬する。

(4) 「輕爆機」(急降下爆撃機) 最近急降下爆撃機が現れて特殊の發達をなしつつある。勿論普通の戦闘機でも三〇呎程度の爆弾を二個位携行して垂直に近い姿勢で高空より急激に降下して敵艦上に轟進殺到して爆撃する戦闘法も實施されてゐることは前述した通りであるが、此の程度ではその効力があまり顯著でない。こゝにいふ輕爆機は一時米國あたりでヘルダイバーと稱されたもので携行爆弾は二五〇呎乃至は五〇〇呎

を目標とする。飛行機を直接目標にぶつけるように自から照準しながら急激に降下して或る高度に達すると爆弾を投下して直ちに機首を引き起す方法で爆撃するから、その命中率は前記の攻撃機がやる一般の高々度水平爆撃法の比ではなく、その効果もまた極めて大きい。

艦上の對空防禦が發達して来るにつれ從來の定針路定速力高高度水平爆撃では爆撃點に到達する前に高角砲に射墜される危険がますます大きくなつて來た。將來海軍用爆撃機はおそらく何れも本様式の爆撃法を採るよやうになることゝ推測される。現に五〇〇呎爆弾を搭載する急降下爆撃機は決して所謂輕爆撃機のカテゴリーに屬さない。普通の攻撃機と何等かはるところのないものである。單に機體の強度がダイブに適する強度を持つに至つたに過ぎないと謂ひ得るのである。

この種の爆撃機は複座戦闘機即ち普通の戦闘機に更に戦闘員一名と旋回機銃をのせ

た複座機へ更に特殊の装置を旋し、大型爆弾を搭載し得るようにしたものであるから爆弾投下ののちは勿論複座戦闘機として活動することが出来る。

米國のカーチス、ボーイング、マルチン等はその有名なものでこれは性能において戦闘機の壘を摩するものである。我が海軍には新鋭九四式輕爆機がある。

この序に一言したきは艦上機は戦闘機も偵察機も觀測機も攻撃機も輕爆機も何れも次第にその形態大いさ性能等が接近して來る傾向があつて、將來はこれらの飛行機は本質的に非常な差異があるわけではなく、任務によつて僅かに差が生ずる程度になるものと考へられることである。しかしこれは單に現状から考へた一つの想像に過ぎないことを斷つておく。

(5) 「飛行艇—哨戒機」 飛行艇は前にも述べた通り遠距離偵察機の種類とも見られる長時間哨戒の任務に最も適して居る。米國にては哨戒機といつて居る。飛行艇は海岸を基地として遠く大洋上に遊弋し或は又艦隊に隨伴して搜索偵察乃至攻撃の任に従ふものであつて、海軍用としては勿論極めて大切なる機種であるが、又一方本邦の如き海國に航空運輸用としても亦大いに着目を怠るべからざるものである。飛行艇はポルトに翼をつけた様なものであるから、海上の航走にも適し特に耐波性に至つては一般水上機の及ぶ處でない。飛行艇は長時間遠距離に行動せんが爲め自然益々大型のものが出現する。數年前迄は四、五百馬力二基裝備位のものが多かつたが今日では五六百馬力乃至八百馬力またはそれ以上のもの三基乃至數基を裝備するものも出現して來た。獨國ドルニエDOXの如きは六百馬力十二基を裝備する大型艇として初めて出現して全世界の驚心駭目の焦點となつたがその後あまり評判がよくないようである。これは飛行機は無暗に大型にしても運用に果して有利であるか否かは疑問である。性能から云つても航續力から云つても余り大型でなくとも却つて大型を凌ぐ優良なものが得ら

れるかもしれない。尤もシコルスキS四二や、マルチン、クワツパー等の大型で極めて優秀なものも最近米國に現はれてきた。マルチン大型飛行艇を作つたマルチン氏の如きは、將來注文さへあれば如何なる飛行艇でもお望み通りに作つて見せると、議會で豪語して居たから、將來は前記の疑問をきれいに解いてくれるかもしれない。特別大型のものは別として今日各國の一般飛行艇を通觀するに二五〇軒時以上の速力を有し航續力三、〇〇〇海里以上に及ぶものも出現せんとして居る。

英國のショート、スーバーマリン・シンガポール、米國のコンソリデーター、ホルアルミニウム、マルチン等我國の一五式、八九式及九一式の諸飛行艇は海軍用として有名なものである。最近米國に於ては飛行艇は非常に進歩したものが陸續として出現して來た其の用法も哨戒よりも寧ろ攻撃に進化して來たようだ。近頃新聞紙上を賑はす太平洋横斷定期航空問題は最近飛行艇の性能が著しく改善された結果である。

(6) 「練習機」 練習機は主として初期の操縦練習をせしめるものであつて陸上練習機と水上練習機とがある。速力上昇力等の能力特に大なるを要求せず、初歩の飛行教育に便利で安定もよく且各種の高等飛行に堪へ又無理な操縦や取扱に對してもこわれないう頑丈のものでなければならぬ。今日八十馬力より百二、三十馬力のものが最も多く用ひられて居る。

最近飛行機の性能が向上して來たので、練習機からいさなり實用機に移れなくなり更に中途に於て比較的高性能の中間練習機を必要とするに至つた。

(7) 「オートジロ」 オートジロは最近研究されて實現したもので特殊の飛行機である。上翼の代りに大なるプロペラの如き回轉翼を有し離翔降着共極めて短距離の滑走で足りる。上昇降下の角度が大きくその上普通の飛行機より遙かに低い速力でも空中に留まり得る独自の性能を持つて居るので、その用途も研究の價值があるものとされ

て居る。我が海軍でも數年前外國より購入して研究して居る。米國英國伊國等には航空母艦或は巡洋艦の甲板に着艦を試みたこともあり、その將來性は軍民各方面から囑目されてゐる。

(ロ) 飛行船

飛行船には軟式硬式半硬式の三種があり、軟式は氣囊の内部に何の骨組もなく浮揚瓦斯の壓力に依つて氣囊の形狀を保つもの、硬式は輕金屬の骨組を以て外形を保ちその内部に多數の瓦斯囊を納め居るもの、半硬式は船首より船尾まで氣囊の底部に骨組を通じて底部の外形を保ち他は軟式同様瓦斯壓力によつて形狀を保つものであるが、軟式は殆んど小型のものに限られ比較的小區域の搜索哨戒等に用ひられ、半硬式は由來伊太利の誇とする所であつてかのアムンゼン、ノビレ兩氏の北極探險飛行の成功によつて大いに盛名を博したが、其後ノビレ少將の失敗以來殆ど聞く所がない一方硬式

は大戦中獨飛行船の活躍に同國の進歩せる技術を全世界から謳はれたものであつたが、昭和四年グラーフツエベリン號(一〇五、〇〇〇立方米)の世界周航によつて復び全世界注目の焦點となつたのである。將來飛行船としては愈大型の硬式飛行船に向ふべきは疑ふ餘地がない。

英國は曩に印度飛行の首途に於いて佛國上空を飛行中R一〇一號(一五五、七四〇立方米)を失ひたるの外残りの一隻R一〇〇號(一四五、八九〇立方米)も既に廢棄し去り當分基礎的研究の外此の方面に大なる發展を企圖して居らぬようであるが、米國は既成ロサンゼルス(六九、九七〇立方米)の外航空五ヶ年擴張計畫の一部たるZR S四及五(各一八四、〇〇〇立方米)の二隻を建造し前者はアクロン後者はメーコンと命名せられたが、アクロンは一昨年四月暴風雨の犠牲となり時の海軍省航空局長モフエット少將以下多數有爲の士と共に壞滅し去つた。

メイコンも昭和十年二月合衆國西海岸に於て訓練中船體の一部に故障を生じ海中に墜落遂に船體はアクロン同様海底に没してしまつた。幸ひ此の時はアクロン遭難に生残りの船長ウィリー中佐の機宜の處置によつて乗員は全部救助された。

佛國伊國については大型硬式飛行船建造計畫は聞かないが獨國はLZ一二八號（一四五、〇〇〇立方米）の計畫を改變しLZ一二九號として約二〇〇、〇〇〇立方米の巨大なるものを建造せんとしつつある。又一方に於てはかくの如き尨大なる飛行船によつて地球上遠距離に亘つて定期的に運輸を行はうとする計畫も相當各國に於て考究されて居る模様である。尙曩に米國にて製作せられたZMC二號の如き金屬被覆の飛行船は現在の布を被覆する氣囊のものに對して全然新しい方面を開拓するものとして注目を要する所である。

飛行船の軍事的價值に關しては從來屢々悲觀論を耳にするところである。それは飛行船はその形態が尨大であつて運動がその上緩漫、充填瓦斯は爆發の危險性の大きい水素瓦斯であり上方に對する防禦の困難なること、空氣抵抗の大きい事等のため戦闘場裡にも亦荒天時の航空にも不適であるとされ、單に戰略的行動にのみ使用されるに過ぎないと云ふやうな非難である。英國のR一〇一號や米國のアクロン、メイコンと引續き悲壯な遭難を耳にして一層此の悲觀論が盛んになつたやうであるが、これらの事故のみから飛行船の無用論を唱へることは少しく早計である。

かくの如き事故についてはその原因を究めこれが對策を講究すべきである。米國に於ても飛行船は前海軍航空局長モフエット少將が在職十二年の長きにわたつて銳意その發達に努力した結果生まれたものであるが、アクロンの喪失と飛行船の最も有力なバトロンたるモフエット少將の殉職と當時めさ／＼發達して來た飛行艇の長距離運動性と相俟つて飛行艇をもつて飛行船に代へ得る、代ふ可きだとの論も出たやうである。

しかし決して米國の識者は飛行船を見捨て、は居ない。今尙熱心に飛行船の有用論を唱へて居る、米國海軍も飛行船事故を徹底的に研究中でその結論を得るまでは飛行船問題は解決延引の狀態である。

なるほど飛行船は戰術的にはあまり有効ではないであらうが戰略的には巡洋艦の代用として極めて有効であらう、特に通商破壊戰等に或は交通線の確保に新らしき分野を開拓し得るであらう。飛行船の機構上の脆弱性も本質的のものと断定し得ない。何故なれば獨逸の飛行船は殆んど天候の障害によつて破損した例がない。米國に今尙完全の姿を保つロスアンゼルスは獨逸が大戦の賠償として自國で製作してこれを米國に引き渡したものである。グラーフ・ツェペリンは如何、一九二八年竣成以來本年春迄の飛行回数總計四百二十三回滯空時間一〇、〇〇〇時間の多きに達し内大西洋横斷回数九十回太平洋横斷一回を算して居るにも拘らず今尙完備の狀態で活躍して居るではないか。アクロン、メーコンは共に機構上の缺陷があつたやうに傳へられて居るからその難破のみを以て飛行船全體の損傷性を云々することは出来ない。

アクロン、メーコンの二大米國硬式飛行船は他の硬式飛行船と異なり爆發の虞なきヘリウム瓦斯を充填しまた多數の銃砲を裝備し何れの方向より來襲する敵機に對しても有効なる集中砲火を加へ得る如くし、又數機の戰闘機を携行し隨時飛行船内の格納庫より戰闘機を發進させて敵機に逆襲を加へ、再び安全に飛行船に收容し得る點に於いて格段の進境を示して居る。また一面かくの如く船腹に格納庫を設けんが爲めに彎入部をつくつたことが強度に影響してゐるところがないとも謂へぬ。

何れにせよ速力上昇力上昇限度の如きにおいて飛行船が到底飛行機に及ばざるの點のみをとつて飛行船の將來に期待すべきものなしとするが如き意見もあるが、これは他面飛行船の有する利點を考慮に置かざるの論であつて決してかくの如き單純なる議

論に迷はさるべきものではない。

三、海上及陸上航空隊の航空機配備状況

以上述べ來つた各種航空機はこれを如何に艦船に搭載し又陸上基地に配備するか、以下これを略述する。

海軍航空部隊は海軍本來の活舞臺が海洋上にある以上自然海上を以てその活動正面とせねばならぬ。かゝるが故に艦隊に附屬する航空隊即ち艦隊航空隊の充分なる兵力及適切なる配備は最も大切なる問題とせられねばならぬ。

(イ) 艦隊航空隊

航空母艦及其他航空機搭載艦船

艦隊航空隊の中心勢力は勿論航空母艦であるが列國は共に航空母艦のみならず戦艦

巡洋艦等にも出來得るだけ多數の飛行機を搭載せんとして居る。

(1) 「航空母艦」 航空母艦は各種飛行機を搭載し艦隊主力の行動に随伴し隨所隨時に此の飛行機を進發せしめまたこれに收容する洋上の移動飛行場とも謂へるものである。航空母艦最大の特徴はその平坦な障碍物のない飛行甲板である。即ち最上部にある甲板は一面の發着甲板となり之れに要すれば着艦飛行機に對する拘提装置（甲板上に展張せる數條の鋼索）を施す。かくして出發にはこの飛行甲板を疾走して離艦し（此の時艦は風に向つて航走する）歸着は右の拘提装置によつて安全に且短距離の滑走丈で停止する様にする。（此の時も出發の時と同様に艦は風の方角に向つて走る）

航空母艦の飛行甲板には檣も砲塔も煙筒も艦橋も全くその上に無い眞の無障礙のもの（之れをフラッシュ・デッキ型といふ。檣は飛行の直前に迅速に横に倒す様にする）と右様のものを飛行甲板の一侧に片寄せて設けてあるもの（之れをアイランド型といふ）

の兩種がある。前者の利點は飛行機の發着は全く無障礙の點にあり後者の利點は操艦（砲火指揮等）に便なるの點にあり兩者夫れ／＼利害がある。日本の赤城、加賀等は前者であり米國のサラトガ、レキシントン等は後者である。又飛行甲板は米國のサラトガ等の如くに艦首から艦尾まで一連の甲板になつて居るのもあり、日本の赤城等の如くに前方が數段になつて居るものもある。之れ等は夫れ夫れ利害得失あり興味ある問題であるが茲には省略する。航空母艦の飛行甲板下には飛行機格納庫を設け飛行甲板との間には昇降機を設けて迅速に飛行機の出し入れを行ふ。その他整備補修兵器格納等の諸設備を施し飛行機運用に必要な一切の施設を完備してある。

列國の航空母艦は左表の通である。

| 國名 | 艦名 | | 基準排水量(噸) | 速力(節) | 搭載機數 |
|----|--------|-------------|----------|-------|--------------|
| | 日 | 米 | | | |
| 英 | 加賀 | サラトガ | 二六、九〇〇 | 二三・〇 | |
| | 赤城 | レキシントン | 二六、九〇〇 | 二八・五 | |
| | 鳳翔 | ラングレイ | 七、四七〇 | 二五・〇 | |
| | 龍驤 | レキシントン | 七、一〇〇 | 二五・〇 | |
| | | サラトガ | 三三、〇〇〇 | 三三・〇 | 一二〇機と謂はる |
| | | レキシントン | 三三、〇〇〇 | 三三・〇 | 同 右 |
| | | ラングレイ | 一一、五〇〇 | 一五・〇 | 約五〇機程度ならん |
| | | レンジャー | 一一、八〇〇 | 二九・五 | 一一四機とも謂はる |
| | | ヨークタウン(建造中) | 二〇、〇〇〇 | 三三・五 | 一三五機附近とも傳へらる |
| | | エンタプライズ(同右) | 二〇、〇〇〇 | 三三・五 | 同 右 |
| 英 | イーグル | イーグル | 二二、六〇〇 | 二四・〇 | 約三〇 |
| | フューリアス | フューリアス | 二二、四五〇 | 三一・〇 | 約五五 |
| | カレーチアス | カレーチアス | 二二、五〇〇 | 三一・〇 | 約八〇 |

| | | | | |
|---|-----------------------|--------|------|--------|
| | グ ロ リ ア ス | 二二、五〇〇 | 三二・〇 | 約六五 |
| | ア ー ガ ス | 一四、四五〇 | 二〇・二 | 約三〇 |
| | ハ ー ム ス | 一〇、八五〇 | 二五・〇 | 約二〇 |
| 佛 | ベ ア ル ン | 二一、一六〇 | 二一・五 | 四八(四隊) |

以上を通観するに航空母艦は我國の赤城、加賀、米のサ、レ兩艦の如く華府條約制限最大限度二七、〇〇〇噸級のもの(米の二隻は特に制限範圍以上)と我國の鳳翔、米のラングレー、英のハームスの如く一萬噸級(又は一萬噸未滿)のものと又それらの中間の二萬噸級のものと同略大中小の三種に分け得ることに気がつくであらう。

然し乍ら前記既成艦中には他種艦船を改造したものが多し爲め以上の各種の大きさを以て直に航空母艦の原則的噸數と見るが如きことも出来ない。元來航空母艦は艦としては攻防孰れも強力とはいへない。しかも形は龐大であるから敵の好餌となり易

い。敵の航空母艦を倒せば搭載機も亦自ら駄目になる。航空機的能力が重要視せらるる今日航空母艦を倒すことは主力艦を倒すにも劣らない價值あることとされる。大なる航空母艦はその搭載する航空兵力も亦自ら大であり大洋上の活動にも適するが一方に於ては所謂大きな籠の中に多數の卵を容れたと同様萬一の場合一層損害の大なる虞もあり又その國航空母艦保有量の制限の問題もあり一艦の噸數が大きければ自然隻數が少なくなる不利もあり更にまた如何に大航空兵力を搭載する大型航空母艦と雖も同時に一隻を二個所には使へない理である。かくの如く航空母艦總噸數にかりに制限ありとするとその單艦噸數即ち隻數の問題は却々以つて重大である。大艦少數を可とするか小艦多數を是とするかこれは國情等にもよることではあるが種々論議をされるところである。當初より航空母艦として設計されたものは比較的噸數が少なくとも改造母艦に比して意外に多數の飛行機を搭載し得るが扱て洋上荒天時にうまく使用出来る

かの問題もあり愈々重要な問題であらう。それは兎もかく米國造艦の現状は此の問題に對して一つの示唆を作すものではないかと思はれる。即ち當初はレンヂャー型一萬三千八百噸を以つて母艦保有量を埋めつくす計畫であつたものが造艦計畫が發表されて見ると一萬三千八百噸はレンヂャーで打切り二萬噸が顔を出して來たのである。

(2) 「水上機母艦」 華府條約及倫敦條約にて航空母艦といふのは前項の飛行甲板を有するものの稱であつて我が能登呂の如きは航空母艦とは言ひ居るもこれは飛行甲板を有せず専ら水上機を搭載し發着は水上にて行はしめデッキによつて艦内より海上に出し又海上から艦内に收めるもので前記條約にいふ航空母艦ではなく補助航空母艦とでも言ふべきものである。わが海軍では最近これを正式に水上機母艦と稱することになつた。外國にて眞の航空母艦を「エイアクラフト・キャリアー」といひ然らざるものを「エイアクラフト・テンダー」といふ所もある。米國のライト(一一、〇〇〇噸)ジエー

ソン(一九、二五〇噸)英のアークロイアル(七、〇八〇噸)佛のコンマンドン・テスト(九、八四三噸)の如き亦これである。右の内佛のコンマンドン・テストは射出機四基を裝備し専ら之れによつて水上機を艦外に射出する(射出機につきては後に述べる)。

此種の水上機母艦は特務艦より隨時これに利用し得ることが多く又戰時商船を徵用して特設母艦とすることも少くない。また最近特殊の構造をした帆布を船尾もしくは舷側に曳航して水上機を此の上に着水收容せしめる着想が生れて研究されて居るがその實用性に關しては未だ確定的結論に到達して居ないやうである。ハインズ式收容帆布などこれに屬する。

(3) 「飛行船母艦」 米のバトカ(一六、八〇〇噸)がこれである(元來は給油船である)その外では今の處ない。飛行船繫留用の大きな繫留檣を備へて居る。曩に米國

大飛行船アタロンが同艦の繫留檣に着發の實驗に成功した。

四二

(4) 「航空母艦以外の飛行機搭載艦船」 戦艦、巡洋艦等には偵察機の類を搭載する即ち出發は射出機により歸着は水上に行ひ其後艦上に引き揚げる方法を執るのが各國共現今一般に行ひつゝある方法である。

此の巡洋艦の飛行機搭載に關し特に着目を要するのは巡洋艦の性能を失はず同時に航空母艦の性能をも賦與し艦隊航空兵力の増勢を圖らんとするものであつて、這般の倫敦條約により巡洋艦保有總噸數の二五バートセントには飛行機着艦用の甲板又はプラット・オームを設けてよいことになつた事により今後所謂「飛行甲板を有する巡洋艦」「航空巡洋艦」の新型特殊巡洋艦が出現するかも知れない。米國あたりでは一時此の建造問題が大分喧ましく論議された。結局流石の米國と雖も此のやうな全然革新的な所謂實驗艦混血兒巡洋艦を建造することは躊躇されたやうで建造は沙汰止みとなつた。

以上の外潜水艦に小型水上機を搭載する問題については各國共相當に研究して居る。嘗て英國に於ては潜水艦に射出機を裝備し潜水艦の浮上後急速に艦上より射出する實驗に成功した。

(5) 「飛行機母船としての飛行船」 飛行船に飛行機を懸吊して隨時離船着船せしむることは相當古くから米國等にて實驗せられた。前に記した通り米國大飛行船メイコンに於けるが如く今後飛行機の母船としての飛行船の用法に關しては段々に講究せらるゝであらう。斯くして兩者の連繫的行動により飛行機特に戦闘機はその短所とする航續力の短少を飛行船によつて補はれ飛行船はその短所とする攻防力の貧弱を該戦闘機によつて補ふといふことになるのである。

(6) 「射出機(カタパルト)」 射出機は近時戦艦巡洋艦に必須不可缺のものとなり或は水上機の母艦にも裝備し又潜水艦や商船にも取り付けらるゝに至つた。射出機を動

四三

の要旨は次の如くである。即ち甲板上又は砲塔上等に長い臺を設け此の上を飛行機を載せた滑走車を急速に走らせる。原動力は壓搾空氣、火藥又は其他の動力を用ひ此等の原動機關を射出機の臺の下や側方に裝備して鋼索を以て滑走車に導いてある。今飛行機を載せた滑走車を射出機の滑走臺の内端に置き飛行機の發動機を全速回轉させて置く、此の時原動機關を作働させれば原動機關から出て居る鋼索により急速に飛行機を載せた滑走車を前進せしめ、滑走臺の前端に達したときに滑走車は停止するが飛行機は滑走車と絶縁して艦外に飛び出すのである。射出機はその大小や原動力等によつて各種の型式があるが大體右の如き方法によつて搭乗者や機體に何等の損傷を與ふることなく射出し得るのである。射出機の一特型の例として英國マツクタグード・スコット社の伸長型（架臺を伸長し得る特殊のもの）の要目を述べれば全長四六呎、全部伸長したるとき七五呎九吋、全重量一九トン、滑走車の滑走距離六四呎、平均加速度

五七哩時にて射出のとき二・一五G、六〇哩時のとき二・三八G、六三哩時のとき二・六二G射出可能の最大重量五七哩時にて射出するならば八、〇〇〇呎、六〇哩時にては七、〇〇〇呎、六三哩時にては六、〇〇〇呎である。

又曩に英國にては陸上用の特殊射出機を製作し重量七噸の爆撃機を射出し滑走三〇米にして飛揚せしむることに成功した。射出機は今後は單に艦船上のみならず地上に於ても盛に使用せらるゝに至るかも知れない。

(ロ) 陸上を基地とする航空隊

陸上を基地とする航空隊は艦隊と策應し協力して海軍終局の作戰目的を達成するのが任務であるが又軍港その他要地の防禦も大切なる一任務とする所である。故に陸上基地の航空隊は大體に於て二段に分つことが出来よう。即ち一はその地を根據地として遠く外洋に進出し敵の艦船に對する哨戒搜索攻撃に任ずるもの、他はその地附近の

警戒に任じ敵機來らば直にこれに殺到して撃破するものである。前者は飛行艇や攻撃機を用ひ哨戒網を遠く外洋に展開し、後者は主として偵察機戦闘機を用ひて常に空中に監視の網を張るのである。陸上を基地とする海軍の航空隊を目して單にその地の防空のみを主務とするものと思惟する如きは極めて大なる誤謬である。

四、海上作戦に於ける航空機の活動

一刻も速かに敵の所在兵力動靜等を知らんとするこれ正に作戦の第一段である。これは廣汎な地域を戰場とする海上作戦においては特に重要である。搜索といひ偵察といひ古來一軍の主將が敵情偵知のことに慘憺たる苦心を拂ふは寔に尤も至極のこと、謂はねばならぬ。然るに航空の發達は俄然として敵情偵察の上に一大革新を齎らした。攻防何れにせよ艦隊または根據地の眼は非常なる遠方に伸びたのである。

各國新型飛行艇中二千乃至三千哩以上に及ぶ航續力を有するものが少なくない今日飛行艇は海上部隊の耳目として約千哩の往復を可能とするに至つた。またかくの如き飛行艇に俟たなくとも艦上の偵察機を以て優に右の半の航程を艦隊の前方へ進出して索敵警戒の任務を果し得るに至つて居る。若し優秀飛行船の如きものが其の獨特の大航續力大偵察力によつて艦隊の耳目たるの任務を遺憾なく遂行し得るとすれば其の偉大なる能力は眞に想像し得べからざるものがあるであらう。

斯くして主力部隊の所在から極めて遠き前程に於て已に敵を發見し茲に早くも空中戦の緒を引き出すことゝなるであらう。これ近代海戦の一大特質である。さて艦隊互に接近するや茲に水上部隊に對し空中部隊を以て大舉進撃が行はれる段取となるのである。航空機の主任務を單に搜索偵察のみと認めて居つたのは最早や過去の一夢であつて現在の航空機が偉大なる攻撃力を有することは近來幾多の實驗に徴して充分に之

を肯定することが出来る。爆弾は勿論照準器も又其の取扱の技術に至つても格段の進歩を遂げ來つた今日航空機の敵艦船に與へ得る打撃は眞に驚くべきものがあると確信する。最近の諸外國の爆撃機の顯著な傾向は速力を極めて大きくし航續力を減じ爆弾搭載量を増加したことである。一八五節の大速力で一時間半航程即ち二百八十哩を前進し大爆撃大魚雷を以て敵の主力に襲撃を加ふることは敢へて難事でない。かくの如き大速力の爆撃機に對しては戦闘機と雖も最優秀のもの以外はまた如何ともしがたいであらうことは前述の通りであるが、さりとてこれを撃破するに夫の軍艦裝備の高角砲の類にのみ依頼することは出来ぬ。近時高角機銃の躍進的進歩に至つては特に見るべきものありと雖も結局來襲飛行機に對抗して之を撃墜阻止するものは先づ戦闘機でなくてはならぬ。茲に於いて來襲攻撃機及び之を掩護する戦闘機とこの一群の來襲飛行機隊を邀撃すべき戦闘機との間に激烈なる空中戦が展開されるであら

う。前述の如き優秀なる快速戦闘機が蒼空に入り亂れて闘ふ有様は恰も往時鎧兜に身を固めた戦士の一騎打ちとも見るべきであらう。更にこの空中の單機對單機式の亂闘の方式に對し戦闘機の編隊戦闘法も盛に研究せられて居る。

かくして一方攻撃機群は敵機の阻止を味方掩護戦闘機群にまかせて置いて夫れ數機宛の數編隊を形成して敵艦隊の一侧より或は數方向より又同時に或は逐次に最も勇敢なる爆撃或は雷撃を敢行するのが常則である。又快速戦闘機群を以て大舉敵艦目掛けて急降轟進しその機銃を以て甲板上一切の生物を殲滅し盡さんとすることも試みられるであらう。又輕爆撃機を以て急降肉薄すると共に爆撃を敢行することも行はれる或は煙幕を展張して一時味方の一切を覆ひ盡し此の間に有利なる戰勢を獲得せんとすることも行はれるであらう。かくして彼我兩艦隊の砲戰期となれば彈着觀測に敵の針路測定に又敵のそれらの機を撃墜に魚雷や潜水艦の見張に數多の任務があるのであ

る。航空部隊の海上部隊に對する與力の如何に大なるかは實に深く考へねばならぬ所である。

以上は海上作戰に於ける航空機の活動を概括的に描いたものであるが、その任務はこれを要約すれば概ね敵飛行機の撃墜、艦船爆撃、主力艦隊に對する雷撃、砲火の彈着觀測、戰術的偵察、艦隊戰に於ける遠距離索敵、煙幕展張、敵輕快部隊の攻撃反撥、交通線上に於ける通商破壊並に保護等である。これらの任務は實際今日迄海軍の各種水上艦艇が分擔したところのもの全部を包含してゐることから考へても如何に航空が海戰に重要な役割を演じて居るかが納得出来ることと思ふ。

五、海軍航空兵力維持方針

次に海軍航空政策に就いて少しく論議を試みよう。

海軍航空兵力の維持方針は、國情によつてそれぞれ異なる。一國に於ける海軍航空政策が極めて理想的のものであつたとしても、必ずしもその政策を直ちに採つて以て他の國に當てはめることは出来ない。併しながら海軍と航空との關係はこれをそのもの自體の關係に於いて觀察するときは、自らそこに共通する一の方式を發見し得るものと考ふる。

海軍本來の任務は洋上にある。従つて海軍航空兵力の活躍舞臺は、海上にあることは論ずるまでもない。利用し得べき陸上根據地の少ない進攻艦隊の側より考ふるならば、海軍航空兵力の使用方針は必然艦隊に基調を置かねばならぬ。従つてその航空機は艦隊から行動し得るものを主幹の兵力として整備すべきであると考え。陸上航空隊は單に練習實驗等の目的を以て設置せられたもので、戰鬥單位として考ふ可きものではない。沿岸防禦の如きも進攻作戰を企圖する國にとつては、海軍本來の任務とは

ならぬものと考えられる。尤もかくの如き國にあつても陸上に基地を置き、戦闘を目的とする航空隊が無いわけではないが、これ等は主として飛行艇を以て編成され、艦隊に随伴して基地を戦況の進展に伴つて移動する。之れがため補助航空母艦を數隻これ等の隊に附屬させて、基地任務に従事するようにして居る。陸上に基地を置いては居るが、一地に固着するものでなく、移動性に重點を置いて居る點が、後述の守勢艦隊のそれと趣を異にして居る。

飛行機に對する進攻艦隊の觀念は、飛行機は結局大砲や魚雷と同様、軍艦にとり不可分の兵装であつて、爆撃機は翼の附いた彈丸であり、雷撃機は遠距離に到達する魚雷であり、偵察機は飛行する見張りに過ぎない。艦隊を離れた海軍航空の存在を許さないと云ふにある。此の考えから生れる飛行機は、自然形態の小さい、従つて二艦に對する搭載機數の多いしかも艦上の猛烈な使用に耐へ得る頑丈な構造を持ち、速力は

極めて大きく、その上輕妙な運動を行ひ得るものとなる。但し航續力はさまで大きくなければならぬ必要もない譯である。機種も制空權獲得に直接寄與し得るやうな戦闘機、索敵機、觀測機等の輕快な運動を爲し得る空中戦闘力の大きな機種を比較的多數搭載することゝならう。

以上は優勢な艦隊が採るであらうと想像される航空政策である。これは海軍の航空維持方針として至極合理的であつて、航空維持の目標が單一であるから、最も海軍航空政策として理想に近く、そこに要求の撞着も起らず、航空思想も統一され、海軍航空の進歩も比較的容易に成就し得る譯である。

之れに反して守勢艦隊の要求する航空兵力は、右の如く簡明に決定し得ない。水上勢力が少なければ、之れに搭載する航空兵力も勢ひ少ないわけである。そこで守勢艦隊はこの不足を補ひ、その上にも水上勢力の不足を補ふ爲めに、どうしても陸上を基

地とする。——此の場合陸上は動かぬ航空母艦と考へるべきである——航空兵力を以てこれをカバーせねばならぬ。陸上に基地を置いて其處を中心として活躍せんとする飛行機は、航続力の大きな大型のものでなければならぬことも、自からうなづけるところである。こゝに於いて艦隊に搭載する航空兵力と、陸上を基地として艦隊に策應すべき航空兵力とは、その本質に於いて異なるものとなり、この異なる要求を兩者ともに充足せねばならぬのが守勢艦隊の悩みであると云へよう。前者に於いては金持喧嘩せずの餘裕を示すが後者に於いては貧乏人の遣り繰り世帯の悲哀を見るのである。

帝國海軍の航空がその孰れに屬すべきやは茲に附言するまでもなからう。

航空が飛躍的進歩を遂げつゝある情勢より見て、航空機の力のみを以て戦の勝敗を決し得る所謂完全獨立空軍の出現の日が來るといふことも、強ち夢物語とのみは云へまい。併し乍ら今日の情勢ではまだ——早急にかくの如き獨立空軍が實現することは

困難であつて、海戦に主力艦を必要としないわけには參らない。戦艦はこゝ、當分の間は依然として艦隊の根幹であることに變りはなからう。飛行機は結局のところ從屬的兵器だ。それ自身の力のみを以て艦隊に決定的打撃を與へることは困難であると思ふ。爆撃のみを以て主力を爆沈することもあり得るかも知れないが、現状では最初からこれを計算に入れて謀を運らすことは危険であると考え。艦隊戦闘は制空權の獲得に始まり、敵に怖るべき航空勢力なきに至つて、己のみ航空機を活躍する所謂制空權下の艦隊決闘を企圖するのが定石であらう。

海戦に於ける飛行機の用法は、水上兵力の補助として軍艦の手足として用ふ可きものである。飛行機を以て敵の所在を確め、先づ航空母艦の飛行甲板、とりもなほさず敵航空兵力の本據を破壊し、然る後飛行中の敵機を優勢なる空中戦闘隊で撃墜し、或は驅逐して制空權を獲得する。而して後初めて我のみ飛行機を活用して、水上部隊の

戦闘力發揮に遺憾なからしめ、戦勝を獲得せんとするのが、一般に共通する海軍航空兵力を維持運用する方針ではなからうかと思ふ。要するに航空なくして海軍の機能は決して完全に發揮せられるものでなく、否な航空部隊を除けば所謂眞に均勢のとれた海軍とは云ひ難いのである。

六、列國海軍航空の現勢

次に米、英、佛、伊、獨、蘇、支に就て海軍航空の現勢と其の擴張計畫を簡単に紹介することとする。

(イ) 米 國

第一に米國は一九三四年七月聯邦航空調査委員會を設置し、米國航空全般に亘つて研究調査を行ひ、一九三五年一月大統領に報告書を提出して其の承認を得、米國航空

政策の再樹立を行つたが、その内容として傳へらるゝ主要點は、

(イ) 一切の民間航空事業は當分の間、政府直轄の Inter-State Commission の

下に統一せしむ。

(ロ) 國內商業航空路の充實、並に國外航空路の開拓を圖ること。

(ハ) 航空事業の援助、研究發明の指導獎勵。

(ニ) 軍用機常備數を海軍一、九一〇機、陸軍二、三二〇機とす。

等にして、概ね従來の政策を謳歌し、且つ更に之を強化せるものと謂ひ得る。而して海軍はその航空政策として艦隊航空隊の整備を最も重要視し、陸上航空隊の如きは練習、實驗の爲めに必要なる小部隊を置くに過ぎない。完全なる制空權を獲得せずして敵飛行機の活動圏内に主力艦隊が進攻することは、極めて困難なるものと觀じ、所謂制空權下の艦隊決戦主義を強調し、海軍航空の一切を擧げて艦隊と共に移動して其

の戦闘に策應するを方針とするものゝ如くである。現在、海軍飛行機總數約千三百機を擁し、艦隊航空兵力として直ちに使用し得るもの約五六〇機を算するが、其の六割強は制空權の獲得に直接寄與し得る輕快駿足の飛行機であることを見ても、前述せるところを首肯し得るのである。而してサラトガ、レキシントン以下の航空母艦四隻は勿論、戦艦、巡洋艦には全部飛行機を搭載し、孰れも艦上操作に便ならしめんがために形態の小さい、しかも構造の牢固な飛行機である。

航空關係員は士官を主體とし、操縦員、偵察員の區別を措いてない。その數は搭乗員士官約九四〇名、下士官兵約三四〇名に達し、孰れも精兵を以て誇つて居る。尙ほこの外に開戦と同時に戦線に使用し得る豫備飛行將校約二五〇名の多きを控置してゐる。

一九二六年樹立の飛行機一、〇〇〇機計畫は一九三一年六月を以て完成して居るが、本計畫は立案當時の海軍力を基準として計畫せられたものである爲め、その後一九二九年協賛の甲級巡洋艦一五隻竝に航空母艦一隻（レンダーアー）相次いで就役するに及び、搭載飛行機の不足を告ぐるに至つた。そこで當局は大いに増勢の必要を力説して來たが、容易に實現に至らず、已むを得ず一時融通の方途を講じて居たが、昨年ヴィンソン建艦計畫が議會に上程せられたので、これに呼應して作戰部長スタンドレー大將は、建造中の艦船に搭載するため、飛行機六五〇機の建造資金を要請し、併せて條約海軍實現の曉には、海軍は飛行機二、一〇〇機を必要とすべき旨を宣言し、遂に航空機一、九一〇機新計畫を樹立するに至つた。即ち一九三四年議會は「一九二六年度決定の一、〇〇〇機計畫に定められたるが如く、海軍使用機數を條約海軍に必要な數まで増加する權限を附與す。但し其の最大限を二、一八四機とす」なる決議案を通過

し、茲に條約海軍の建設に伴ひ、海軍航空兵力を水上兵力に相應せしむることを目的とする海軍航空新擴充計畫が制定された。そこで差當り五ヶ年繼續の事業として六五〇機を増勢することとなり、目下第一年分二二五機増勢を終り、第二年度二七三機の増勢を着々實施中である。昨年八月海軍卿は條約海軍に必要な機数は當分、一、九一〇機にて充分なる旨を聲明した。昨年末以來軍備擴充氣運の擡頭により、一般輿論も迅速なる一、九一〇機計畫の完成を支持する情勢にあるものと判定せられる。

以上の如き大擴張計畫樹立に伴つて人員は如何にするか、從來の飛行將校増加率は、年平均六〇名程度であるから、現状を以て進む時は、到底この大擴張に應じ得べくもないことは瞭然たる處である。茲に於いて搭乗員充足の對策として、豫備飛行將校制度を改變して飛行候補生 (Flying Cadet) 制度となし、本年度中に飛行候補生約五百名を採用して、一箇年の教育を終り、これを艦隊に三箇年間勤務せしめることとなつ

た。

一九三六年度正規海軍航空豫算は三九、五〇〇、〇〇〇弗（前年度に比し二〇、八〇〇、〇〇〇弗増）にして、この外に復興費より飛行機購入費として一二、五〇〇、〇〇〇弗を充當せられ、合計五二、〇〇〇、〇〇〇弗の膨大なる豫算を示し、前年度及び前々年度に比し優に倍額を示して居る。

米國の海軍航空は多年航空局長の椅子にあり、遂に現職のまゝ飛行船アクロンの難破に遭難したモフエツ少將の賢明なる指導の下に十年の昔、既に今日の航空政策を確立し、爾來、銳意これが實現に努力し來れる結果、今日世界に冠絶せる海軍航空を築きあげたのである。海軍航空として學ぶべき點が極めて多いのは故あることと思ふ。

(口) 英國

次は英國であるが、英國は周知の如く、日本と趣を異にし、獨立空軍の制度を採用

して居る。空軍政策としては歐洲最大空軍國一國を標準として之れに對し、開戦初期に於いて本土防空を完ふし得る本國防空軍の充實に努むると共に、優秀なる人員及び器材を完備し、戦時大擴張の核心たらしめんとして居る。

從來、佛國空軍を標準とし來つたが、最近擡頭した獨空軍勢力に對し英空軍の劣勢を許さずと豪語し、本年五月大擴張計畫を樹立したことも、右の政策の現はれと視ることが出来る。

全世界に誇る大英帝國領土に對しては、空軍を以て植民地間の迅速なる交通連絡に任じ、海外駐屯の陸軍は成る可く空軍を以て是に代へるの方針を持續して居る。空軍現勢力は八十九箇中隊、機數九九〇機を有し、内、艦隊航空兵力は十三箇中隊と六個小隊、機數約一六五機である。

本國艦隊航空隊としてはカレデヤス、フユリヤス、グロリヤスの三航空母艦の外、

戦闘巡洋艦の一部に總數一〇五機を搭載して居る。海外部隊航空兵力は地中海に母艦イミダルを配し、飛行機十八機、支那艦隊に母艦ハミスを附屬させ、飛行機二十三機を、その外東印度艦隊、南阿西印度艦隊等に少數の飛行機を有して居る。

空軍人員は總計三一、〇〇〇名、内士官三、一九一名を有して居る。艦隊航空隊員は主として海軍士官を以て充當せられて居る。即ち操縦者は七割以上、偵察者は全部海軍士官を以て之れに當てることに定められ、操縦者合計一五九名、内空軍士官四六名、偵察者は海軍士官約七〇名を有してゐる。

一九二四年立案の本國防空軍五十二箇中隊、五箇年増勢計畫は、容易に完成の域に到達しなかつたが、一九三三年十月獨逸の國際聯盟脱退後の歐洲軍備熱に刺戟せられて、英國に於いても空軍擴張運動旺盛となり昨年七月十九日ポールドウインは下院に於いて、一九三九年四月迄に本國防空軍三十三箇中隊及び艦隊海外駐屯部隊合せて八

箇中隊、合計四十一箇中隊を増加する空軍擴張五箇年計畫を發表した。次いで十一月二十八日チャーチルは下院に於いて英帝國軍備の不備、特に防空力の不足を論じ、英帝國の國防力は最早や陛下の忠良なる臣民の平和安全並に自由を確保するに十分ならざる旨を提議した。之れに對しホールドウィンは英空軍正規部隊の現有勢力を説明し常備機の外に平時消耗の代換用豫備機其他訓練機、實驗機等多數ある旨を述べ、從つて今日歐洲に於いては直接英帝國に脅威を與ふるものなく、不當なる警戒恐怖の原因なし、然れども吾人は將來を注視するの要あり、將來の不安たるや正に大なるものありと答辯し、七月發表の空軍擴張五箇年計畫の大半を一九三七年四月迄に完成すべき旨を公表した。

一九三五年度空軍總豫算額は二三、八五一、一〇〇磅にして、前年度に比し三、六八五、五〇〇磅の増加を示し、擴張計畫の促進具體化に進んだ。越えて本年三月ナチ

ス獨逸の空軍宣言に次いで暴露された獨逸空軍の異常なる脅威に對し、既定の擴張計畫に變更を加へ、更に是を促進強化するの必要を感じ、五月二日首相は下院に於ける軍備に關する一般討議に於いて獨逸の再軍備宣言に關連して英帝國の國防方針を述べ、英國空軍は獨逸空軍に對し劣勢の地位を甘受し得ざる旨を力説した。五月九日に至り空軍省は俄然國內軍需工業會社に對し、準戰時待機命令を發し、大量製作の意圖を明示した。越えて五月二十二日、政府は上下兩院に於いて第二次空軍大擴張計畫を發表し、一九三七年迄に英本國防空軍を一躍現在の三倍一、五〇〇機に増加し、之れに伴ひ操縦者二、五〇〇名、其他の空軍人員二萬を増員する旨を宣示し、併せて若し今般の新擴張案にして獨逸に劣ることを發見せば、如何なる犠牲を支拂うとも更に擴張に當るべき旨を附加聲明した。之れがため七月中旬に至り擴張經費として五、三三五、〇〇〇磅を追加豫算として計上し、議會に提出した。尙ほ最近の伊エ紛争の進展に伴

ひ、空軍省は各工場に二十四時間作業を命じ、狂気の如く擴張に奔命して居る。來年度空軍豫算は少くも三五、〇〇〇、〇〇〇乃至三六、〇〇〇、〇〇〇磅程度を降らぬものと觀察されて居る。

(ハ) 佛 伊

第三に佛國であるが、佛國は對英政策の後楯としても、亦再軍備獨逸の優秀なる機材に對抗する爲めにも空軍の重要性を痛感して居る。一九二八年佛國も英國と同様獨立空軍制度を採用したが、編成後未だ日淺く且つ制度上にも幾多の缺陷があつて、機材に於いて英・米・獨等に立ち遅れの觀があるが、一九三四年春、前空軍參謀總長ドナン將軍入りて航空大臣となるや、制度改變を斷行し、臨時國防豫算中六億法餘を空軍機材更新に充當し、猛訓練を勵行する等、大いに内容の改善を圖り、世界第一空軍の虚名を捨て、實を得んとする熱意に燃えて居る。獨の空軍宣言に先んじて、その民間航

空の顯著なる發展に脅威を感じて來た英を説いて協同防空の協定を行ひ、更に之れを擴大して伊をも之れに包含せしめて對獨恐怖を脱却するの方策を講じたことは、世人の記憶に今尙ほ新たなることである。最近惜氣もなく航空先進國の誇を棄て、技術を米國に求めんとするに至つたことなども、質の向上に努めんとする熱意の現はれと觀ることが出来る。

海軍航空は空軍編成の法律化に實質的に影響せられるところは殆んどなく、一九三四年以來人員、機材に要する豫算は海軍省の所管に移り、獨立海軍航空を保有するものと謂ひ得るのである。

佛空軍總數は一六五箇中隊約一、七〇〇機、内海軍關係五二箇中隊約五五〇機である。母艦ベアルン及び水上機母艦コンマンダン・テストを初めとし、艦隊に七箇中隊約六十機を搭載して居る。佛空軍は右の外豫備機、練習機等一切を合算するときは、

動員當初に使用し得べき總機數は約四、〇〇〇機に及ぶべしと觀測せられて居るが、前述の如く舊式の機材が多い。

一九二八年佛國航空省創設に際して、新航空大臣は一九三八年迄に五十二箇中隊を増設し、總計二〇一箇中隊に擴張する計畫を樹立したが、最近の情報によれば、本計畫を一九三六年中に完成の豫定であると傳へられて居る。前述の如く一九三四年六月には特別追加豫算六億二千萬法支出の決定を見、老朽機を更新することとなり、各種飛行機を通じ總計約七四〇の新銳機を購入する計畫である。

伊國は大戦末期約三千の飛行機と、數隻の飛行船を所有して居たが、戦後凋落の已むなきに至つた。然るに一九二三年ムツソリーニ首相の印綬を帯びるに及び伊國々防の將來は空軍兵力を以て之れを完うするの方針を策定し、數度の官制改革の後一九二五年空軍省を設立した。バルボ將軍空軍大臣となるや、自から陣頭に立つて前後二

回に亘り大西洋横斷編隊大飛行を敢行して、伊國空軍の威力を海外に發揚したことは、世人の記憶に存するところである。一九三三年十一月以後ムツソリーニ首相自ら空相をも兼攝するに至り、益々空軍の擴充に意を注ぎ、一九三四年七月臨時費十二億利の特別支出を承認し、機材の更新を圖り、銳意内容の充實に當つて居る。

伊國空軍現勢力は、一三一箇中隊機數約、一、二〇〇機、内海軍關係約一九〇機を有して居るが、伊海軍は水上機母艦一隻を有する外、航空母艦を所有せず、艦載機總數は約六〇機である。

一九二五年五箇年計畫を樹立し、一八二箇中隊約三千機を整備する計畫であつたが、未だ完成するに至らない。そこで前述の如く一九三四年七月臨時費十二億利の特別支出を行ひ、六箇年計畫を以て機械の更新に充當するに至つたが、獨逸を初め列強の空軍擴張に刺戟せられて、一九三五年三月更に之れを三箇年に短縮した。斯くの如くア

勝獲得の端緒たるべきに着目し、革命後軍備の建直しを行ふに當り、舊來の傳統を打破して斷然空軍の擴張に乗り出し爾來機材、人員の整備並に航空工業の發達に對し拂へる努力と資力は陸海軍に對する比にあらず、過去十有餘年の間に微力なる空軍より陸上機約二、七〇〇機、水上機約四〇〇機の大空軍を建設した。昨年末には航空母艦一隻を竣工せしめ、海軍航空に於いても相當進出してゐる。

隣國支那に於いては滿洲上海事變後航空救國の口號下に頓に空軍熱旺んとなり、列國より機材を購入し、教官を招聘して空軍建設に努めた結果、各軍閥毎に急激に發達し來た。その總數約六五〇機、内海軍に屬するもの二四機と稱せられて居る。而して其の勢力分布の狀は、南京、廣東、廣西の順にして、中央空軍最も優勢なるは謂ふを俟たぬ。右の外地方的小勢力を有する四川、山西、雲南等の空軍があるが、問題にするに足らぬ。

序に列國航空勢力の對支進出狀況の概要を述べれば、米國は昭和七年七月ジュエツト大佐を總顧問とする米人教官團十數名渡支し、杭州を本據として中央空軍の指導に當り、列國中最も多數の飛行機を輸出し、或は中國航空公司の發展に力を致す等、對支進出程度は列國中隨一である。廣東空軍に對しても機材の輸出、教育等に當つて居る。

伊太利は昭和八年一月ベルナルデイ氏外三名の伊國著名飛行家が顧問として渡支したのを契機として、南昌を中心として機材の賣込み其他中國人視察團を渡伊せしむる等、一躍米の牙城に迫るの觀を呈して居る。

英國は中央及び廣東空軍に對しては、米伊兩國に壓倒せられて不振の情勢にあるも、廣西空軍に對しては全く他の追隨を許さぬ有様である。主として極東航空公司を足場として發展して居る。

アシスト政権以前は僅に三〇〇機の劣勢にあつた伊國空軍が、今日百數十中隊千數百機の大空軍を實現したことは、一にムソリーニの偉大なる努力に依るが、その裝備狀況は之れを仔細に觀察するに、決して新鋭空軍を有するものとは斷じ難い。併し乍ら昨年の更新計畫に依り、舊式機は全部伊國製新鋭機を以て代換せらるゝ日も近く、特にその爆撃機は驚異的性能を誇つて居る。傳へらるゝ處に依れば、伊政府は東阿遠征に備へんが爲め、三百機の重爆撃機を東阿植民地へ派遣したと云ふ。是等は孰れも爆撃機千挺を搭載して、時速三百五十浬を出し、航續力二千浬を有するものであると、伊太利自ら大いに宣傳して居る。

(二) 獨 蘇 支

獨逸はヴェルサイユ條約第五編の苛酷なる條件により、前後十五箇年間空軍の保有を禁ぜられて居たが、有事に際しては民間航空を直ちに空軍に轉化せんとして、航空

省統制の下に計畫的に諸般の準備を進めて來た。偶々佛の唱導になる全歐防空協定の成立を以て、獨は空軍國として公認せられたるものとなし、遂に本年三月再軍備宣言を敢行し、四月一日より公然空軍部隊を整備するに決し、全國を五空軍管區に分ち、別に海軍航空隊を設置して、航空關係人員及び施設の大部を空軍組織とした。而して之れを陸海軍に分屬するか獨立空軍とするかは、未だ決定の運びに至らぬが、取敢へず獨立空軍として整備することゝなつた模様である。其の勢力に關しては幾多の情報あり、區々として不明なるも、概ね實用機二、〇〇〇機程度を保有して居るものと推定せられる。

將來計畫としては三、五〇〇機程度に擴張の意圖なるが如くに觀察せられて居る。

蘇は歐洲大戰の教訓に徴し、將來戰に於ける空軍の役割の偉大なるべきこと、開戦劈頭敵軍に加ふる空軍の第一撃は爾後敵の後方に對する執拗なる空襲と相俟つて、戰

勝獲得の端緒たるべきに着目し、革命後軍備の建直しを行ふに當り、舊來の傳統を打破して斷然空軍の擴張に乗り出し爾來機材、人員の整備並に航空工業の發達に對し拂へる努力と資力は陸海軍に對する比にあらず、過去十有餘年の間に微力なる空軍より陸上機約二、七〇〇機、水上機約四〇〇機の大空軍を建設した。昨年末には航空母艦一隻を竣工せしめ、海軍航空に於いても相當進出してゐる。

隣國支那に於いては滿洲上海事變後航空救國の口號下に頓に空軍熱旺となり、列國より機材を購入し、教官を招聘して空軍建設に努めた結果、各軍閥毎に急激に發達し來た。その總數約六五〇機、内海軍に屬するもの二四機と稱せられて居る。而して其の勢力分布の狀は、南京、廣東、廣西の順にして、中央空軍最も優勢なるは謂ふを俟たぬ。右の外地方的小勢力を有する四川、山西、雲南等の空軍があるが、問題にするに足らぬ。

序に列國航空勢力の對支進出狀況の概要を述べれば、米國は昭和七年七月ジュエツト大佐を總顧問とする米人教官團十數名渡支し、杭州を本據として中央空軍の指導に當り、列國中最も多數の飛行機を輸出し、或は中國航空公司の發展に力を致す等、對支進出程度は列國中隨一である。廣東空軍に對しても機材の輸出、教育等に當つて居る。

伊太利は昭和八年一月ベルナルデイ氏外三名の伊國著名飛行家が顧問として渡支したのを契機として、南昌を中心として機材の賣込み其他中國人視察團を渡伊せしむる等、一躍米の牙城に迫るの觀を呈して居る。

英國は中央及び廣東空軍に對しては、米伊兩國に壓倒せられて不振の情勢にあるも、廣西空軍に對しては全く他の追隨を許さぬ有様である。主として極東航空公司を足場として發展して居る。

獨逸は歐亞航空公司を踏臺として對支進出を圖り、主として航空路の經營に當り、米系中國航空公司に對立の姿勢を示してゐる。佛は支那空軍の濫觴時代には相當に賣込んでゐたが、最近は餘り振はない。

(木) 帝國海軍

以上極めて平凡無趣味ながら、海軍航空を中心とする列國軍事航空の現勢を一旦も記述し、併せて列強が例外なく財政の許す限りの空軍擴張に奔命して居る狀況の紹介を試みた。

帝國軍事航空は、詳細に之れを語るの自由を有せぬことを遺憾とするが、その沿革竝に現狀を略述して見るならば、

明治十年五月西南の役に輕氣球を使用せんが爲め陸軍省より海軍省に輕氣球の製作を依頼し海軍兵學寮機關科に於て製作せられ初めて築地海軍練兵場に於て輕氣球の飛



翔實驗を行ひ、上昇百二十間に達した同年十一月七日天覽に供されたが風の爲索切斷し遂に氣球を失つてしまつた。其の後氣球の研究は遺憾乍らそのまゝに放置された此の氣球の大きさは徑三丈高四丈五尺容積一四、一三七立方尺填充瓦斯は最初石炭瓦斯後に水素瓦斯を使用した。降つて明治四十二年臨時軍用氣球研究會の官制が發布せられた。次いで四十五年六月海軍航空術研究委員會設置せられ、神奈川縣追濱に飛行場を設置し、カーチス式七〇馬力水上飛行機二臺を米國に、ファルマン式七〇馬力水上飛行機二臺を佛國に注文し、其の製造監督たる海軍兵科將校及び機關官をして傍ら飛行機操縦其他各種の實習調査に従事させた。

大正元年十一月以降歐米より歸朝した飛行將校指導の下に、將校下士官の訓練を開始した。是より曩、外國飛行機の舶着するや、之れが研究を横須賀海軍工廠に命じ、爾後半歳ならずして國産機體を實用するに至つた。大正二年若宮はカーチス及びファ

ルマン式飛行機を搭載して初めて海軍小演習に参加した。大正三年八月、日獨開戦當時は帝國海軍飛行機總數實に十二機、飛行將校は僅かに十五名を有するに過ぎなかつたが、此の僅少な人員と機材とを母艦若宮に搭載して青島戦に参加せしめ、能く偵察彈着觀測、爆撃等を實演してイルチス砲臺を沈黙せしめ、赫々たる偉功を樹てた。大正五年初めて海軍航空隊三隊新設豫算成立し、逐次航空軍備の充實に着手した。大正十年臨時海軍航空術講習部を新設し、世界大戰に従軍せる老兵、英國センビル大佐以下三十名を招聘して霞ヶ浦及び横須賀に於いて航空術を傳習せしめた。

大正七年五隊、大正九年七隊増設の豫算成立し、茲に所謂十七隊計畫が成立した。現本計畫は昭和六年に完成したのであるが、その後二十數隊の増設計畫が成立した。現在霞ヶ浦、横須賀、館山、佐世保、大村、吳、佐伯、大湊等に陸上航空隊約二十五隊を設置し、尙ほ其他の地に航空隊を増設中で、昭和十二年末迄には大體約三十數隊に

達する見込みである。

以上は主として陸上部隊に關するものであるが、海上部隊も略々右と並行して充實せられ、現在赤城、加賀、龍驤、鳳翔の航空母艦戰艦巡洋艦の大部に飛行機を搭載して日夜猛訓練に従事して居る。昭和七年上海事變に際し海軍航空部隊の活躍した狀況は後に概説する。

近時軍部豫算、わけでも航空豫算の膨大を耳にするが、前述列強の航空擴張計畫に照して見るも、また航空の海戦に於ける有用性に鑑みるも、決して過大とは謂ひ得ない。併し乍らその局に當るものは、微細の點まで漏れなく仔細に研究して、飽く迄經濟的軍備を計畫せねばならぬことは申す迄もない。

機材に於いては從來外國に比して遜色のあつたことは、航空後進國として致し方もなき所であつたが、最近大いに技術方面の發達を見、帝國新銳機中には外國新銳機と

比肩し得るもの少なしとせず。近く是等を凌駕するものが出現することゝ信ずる。
現在帝國海軍の使用して居る飛行機は左の通りである。

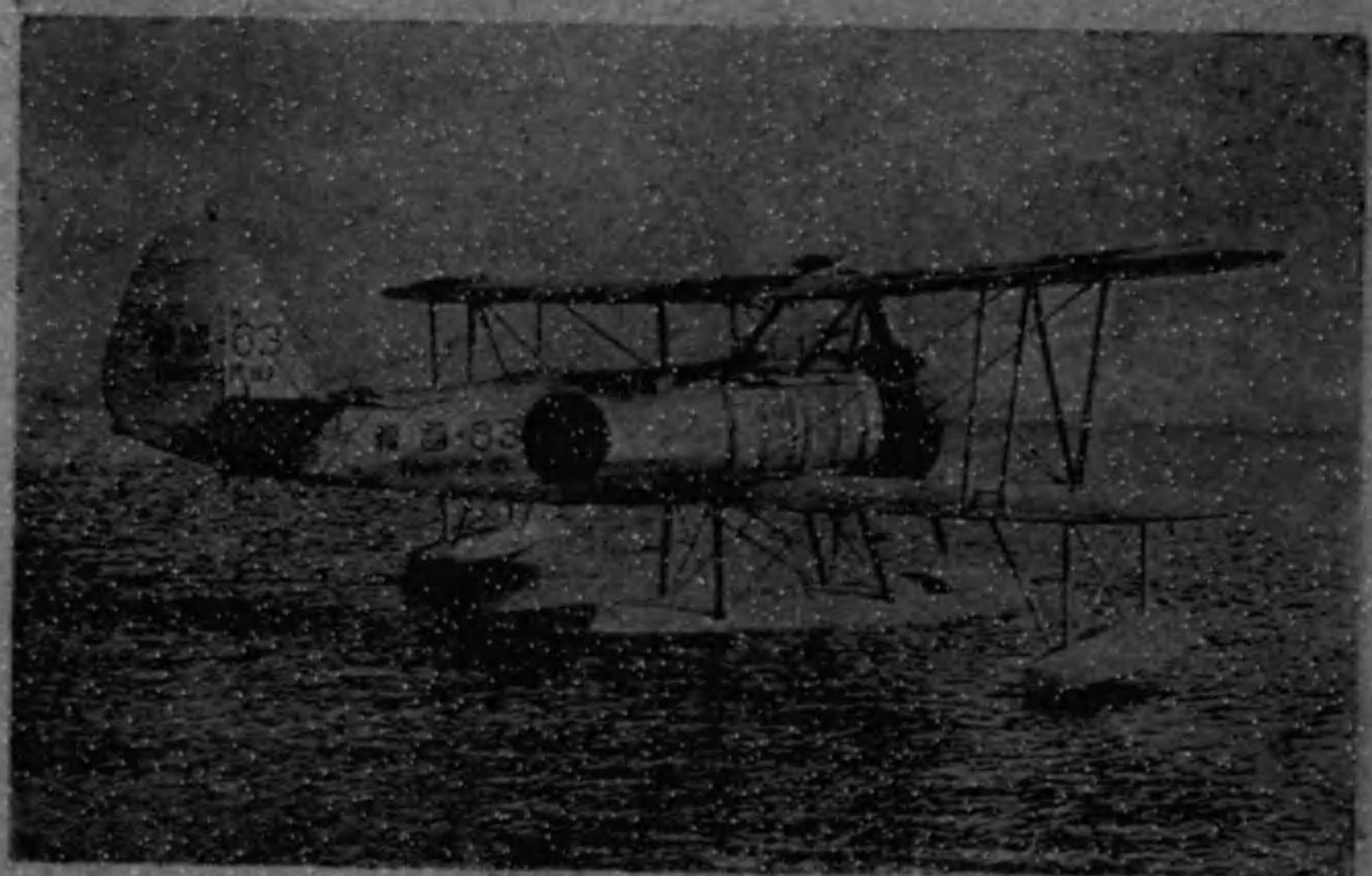
帝國海軍飛行機

| 艦 | 制式 | | | | | | 種機 |
|------------|----------|------------|------------|------------|------------|----------|---------|
| | 偵察機 | | | 戦闘機 | | | |
| 一三式二號艦上攻撃機 | 九一式水上偵察機 | 九〇式三號水上偵察機 | 九〇式二號偵察機二型 | 一四式三號水上偵察機 | 一四式二號水上偵察機 | 九〇式艦上戦闘機 | 三式艦上戦闘機 |
| 複(艦) | 複(双舟) | 複(双舟) | 複(單舟) | 複(双舟) | 複(双舟) | 複(艦) | 複(艦) |
| 三イスペイン | 一神風 | 三ジュピター | 二壽一型 | 三ローレン | 三ローレン | 二壽二型 | 一ジュピター |
| 四六〇 | 一三〇 | 四六〇 | 四六〇 | 四五〇 | 四五〇 | 四六〇 | 四〇〇 |
| 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 |
| 一〇二 | 九 | 九九 | 一四三 | 一〇二 | 九 | 一四 | 一三 |
| 四・七 | 四・〇 | 六・五 | 六・五 | 七・〇 | 六・六 | 六・六 | 二・五 |
| | | | | | | 三・〇 | 六・〇 |
| | | | | | | 五・〇 | 六・〇 |

| 飛行機 | | | | | | | | | | | | |
|------------|----------|----------|---------|-----------|------------|----------|--------|----------|----------|------------|------------|------------|
| 練習機 | | | | 飛行艇 | | | | 攻撃機 | | | | |
| 九〇式艦上練習戦闘機 | 九三式水上練習機 | 九〇式水上練習機 | 九〇陸上練習機 | 三式二號陸上練習機 | 九三式陸上中間練習機 | 九〇式二號飛行艇 | 八九式飛行艇 | 一五式二號飛行艇 | 九二式艦上攻撃機 | 八九式二號艦上攻撃機 | 八九式一號艦上攻撃機 | 一三式三號艦上攻撃機 |
| 複(陸) | 複(双舟) | 複(双舟) | 單(陸) | 複(陸) | 複(陸) | 複(艇) | 複(艇) | 複(艇) | 複(艦) | 複(艦) | 複(艦) | 複(艦) |
| 二壽二型 | 二天風 | 二神風 | 四天風 | 二神風 | 六ローリス | 七九〇式 | 五ローレン | 三九一式 | 三イスペイン | 三イスペイン | 三イスペイン | 三イスペイン |
| 四六〇 | 三〇〇 | 三〇〇 | 三〇〇 | 三〇〇 | △三 | 六〇〇 | 四五〇 | 六〇〇 | 六五〇 | 六五〇 | 六五〇 | 四六〇 |
| 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 三 | 二 | 二 | 二 | 一 | 一 | 一 | 一 |
| 一五 | 一〇八 | 八〇 | 九二 | 一八 | 一五 | 一〇六 | 九二 | 二八 | 二五 | 一〇八 | 一〇二 | 一〇二 |
| 三・〇 | | | 五・三 | | 一四・五 | 一三・〇 | 一一・〇 | 四・五 | 三・〇 | 三・〇 | 三・〇 | 四・七 |
| 五 | | | | | | | | | | | | |



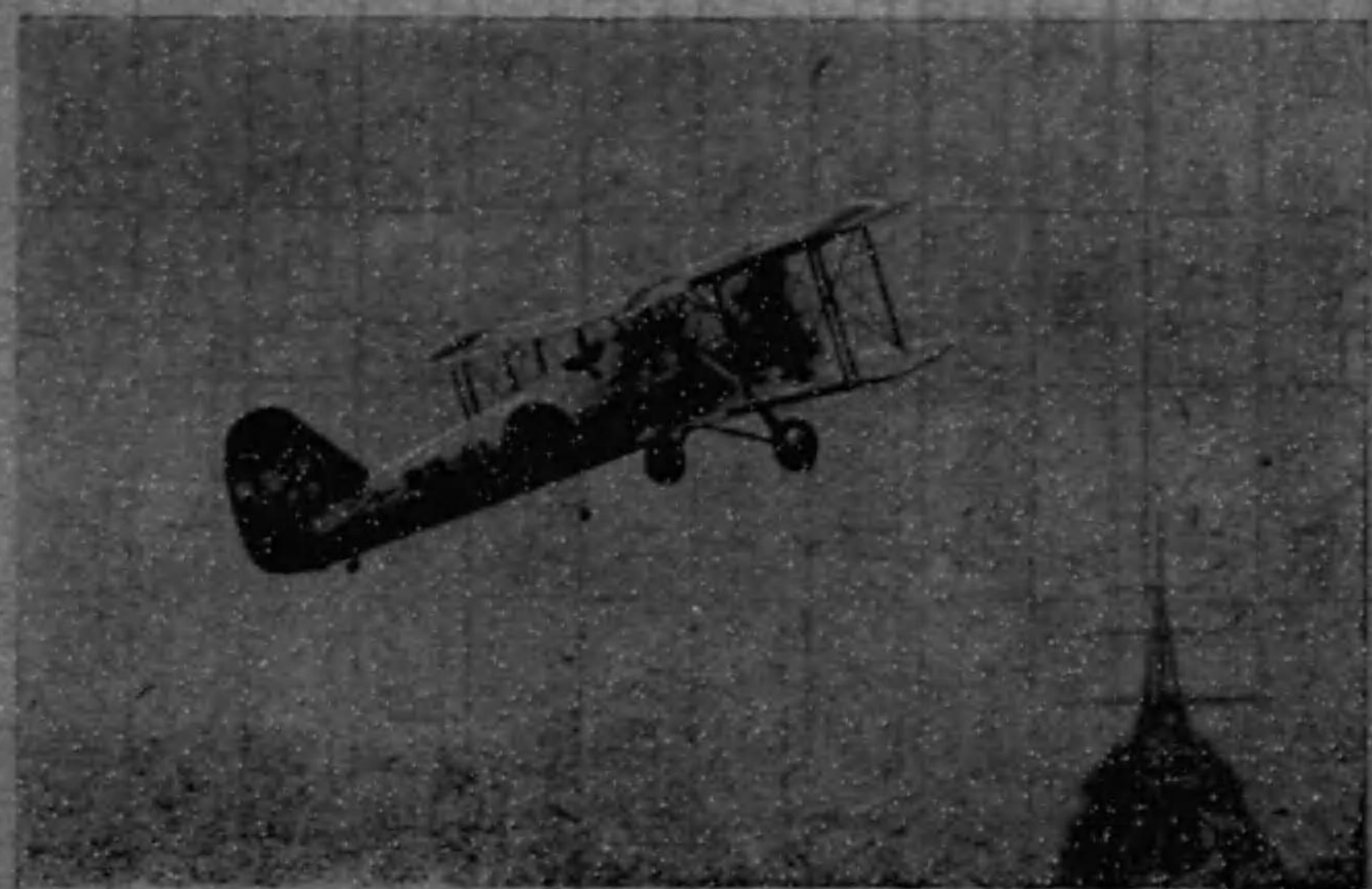
九四式水上偵察機



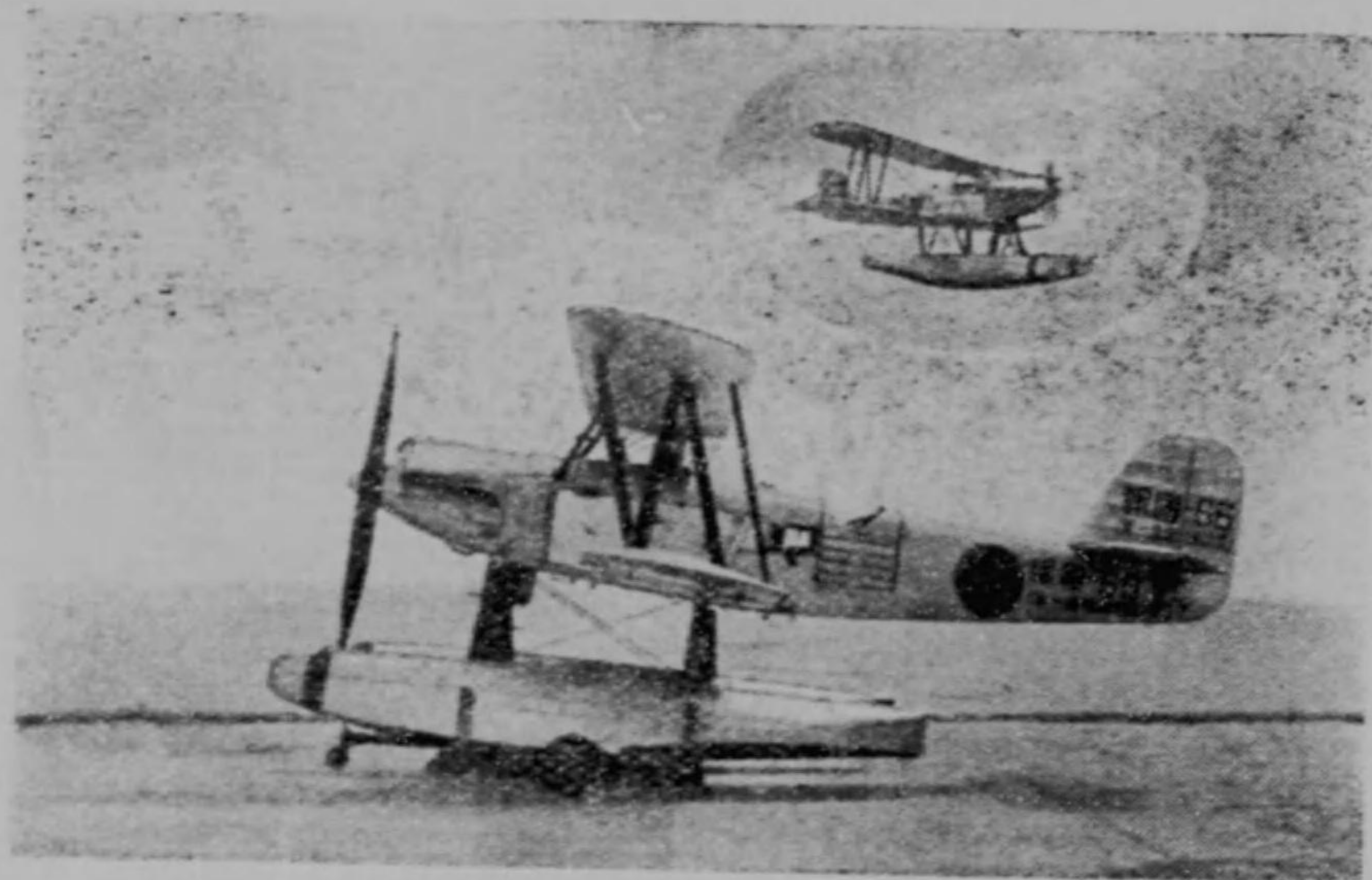
九〇式水上偵察機



九〇式水上戦闘機



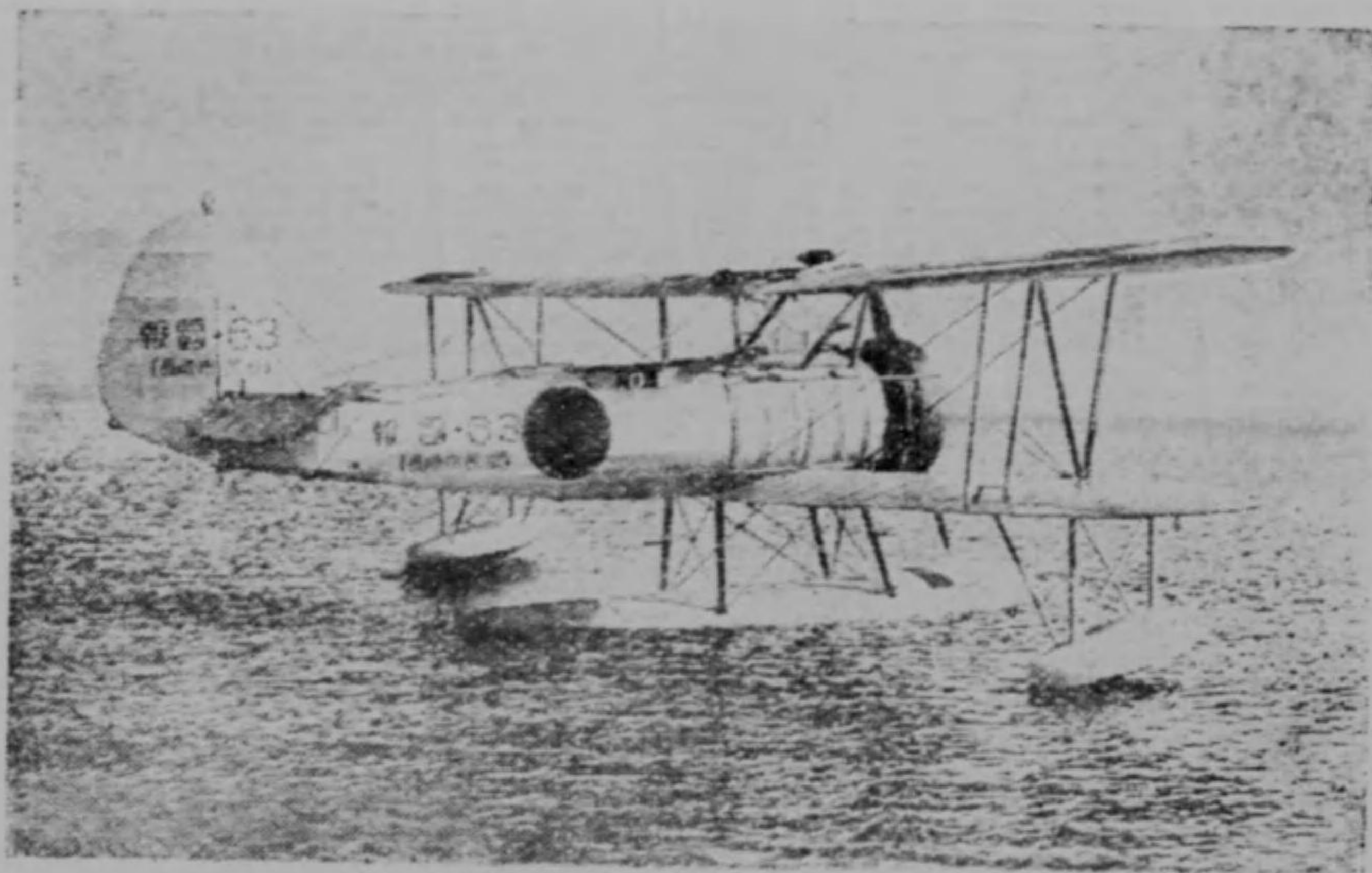
九四式水上軽爆機



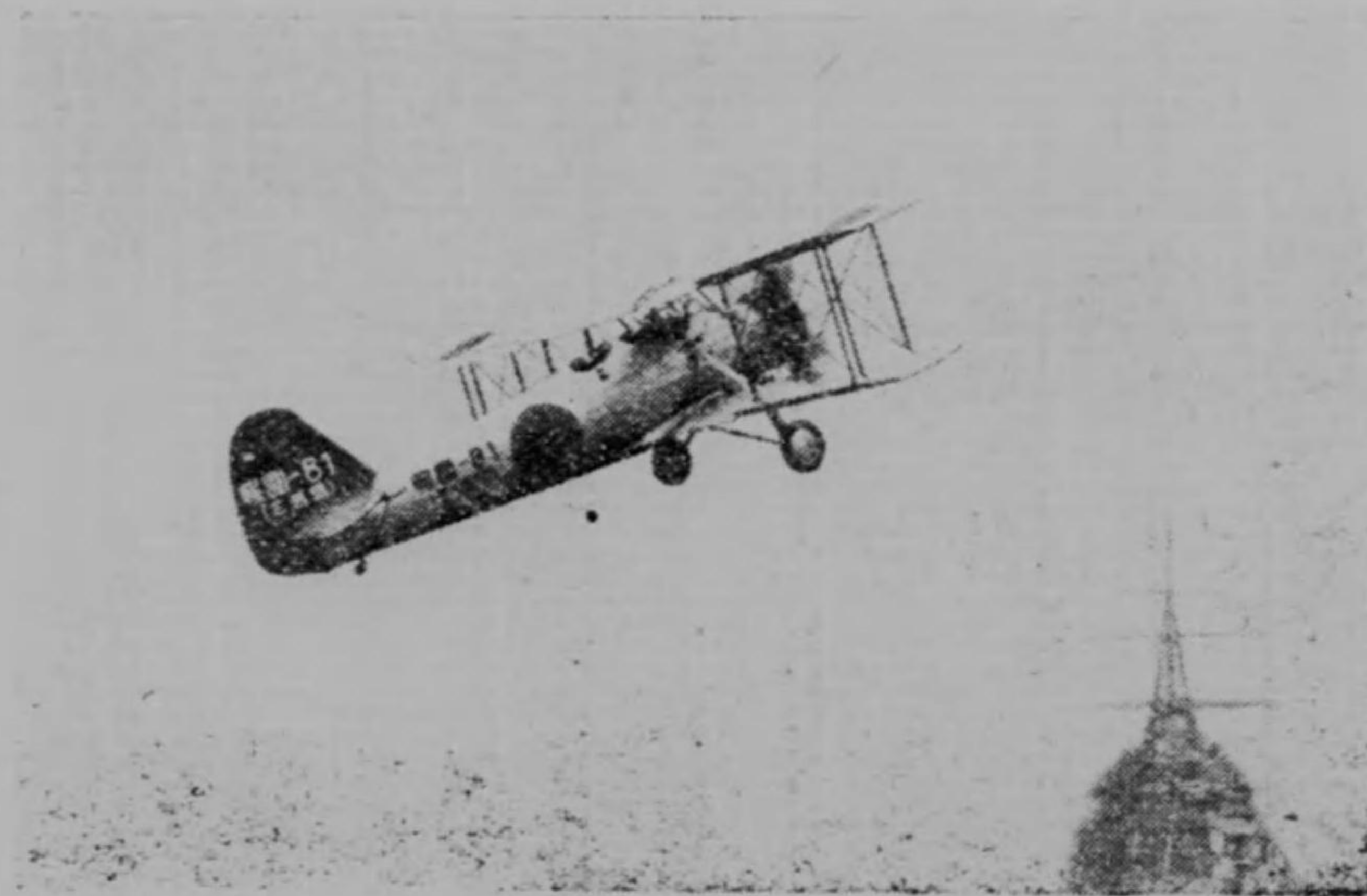
九四式水上偵察機



九〇式艦上戦闘機



九〇式水上偵察機



九四式艦上軽爆機



九二式艦上攻撃機



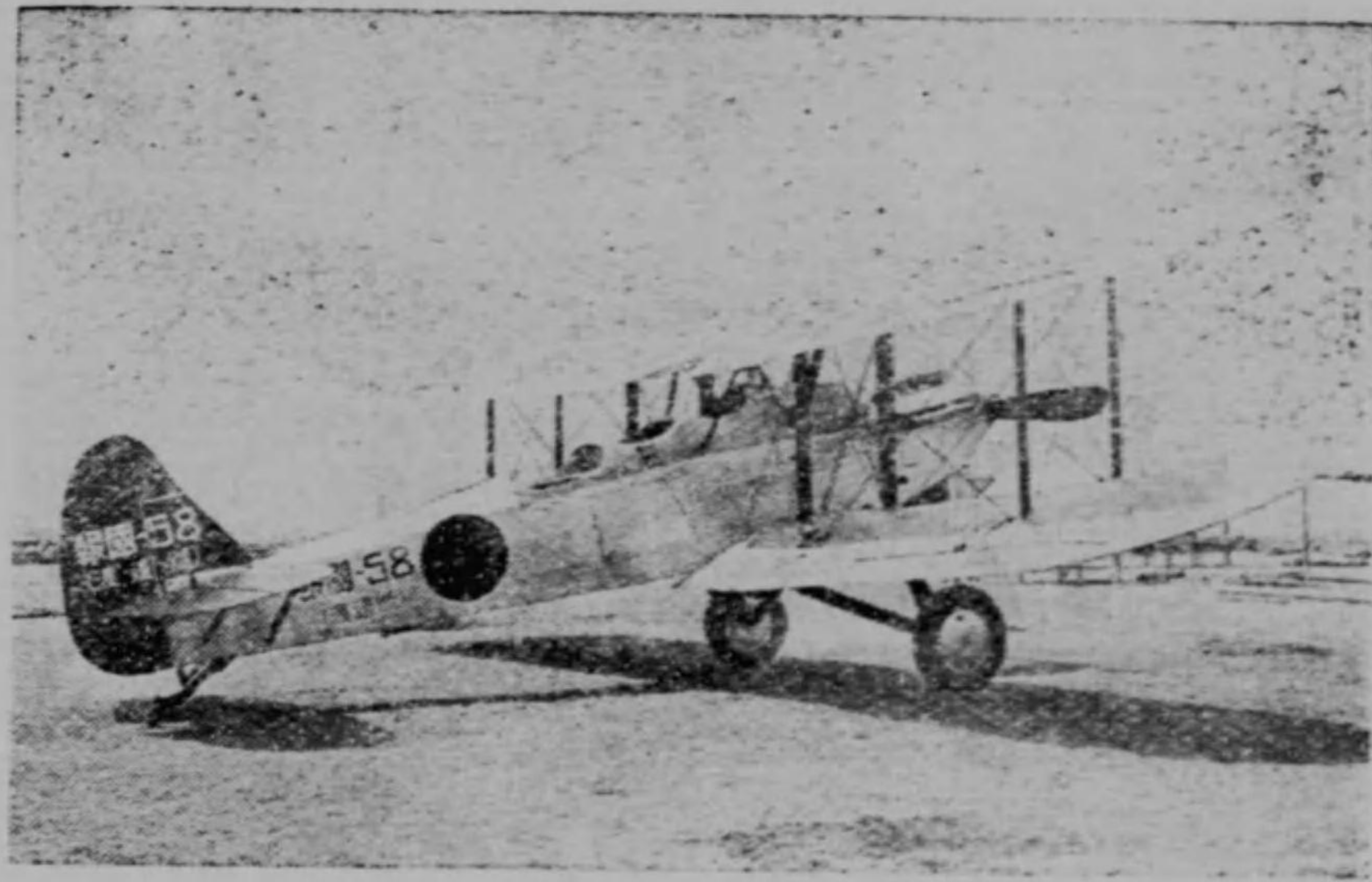
一五式飛行艇



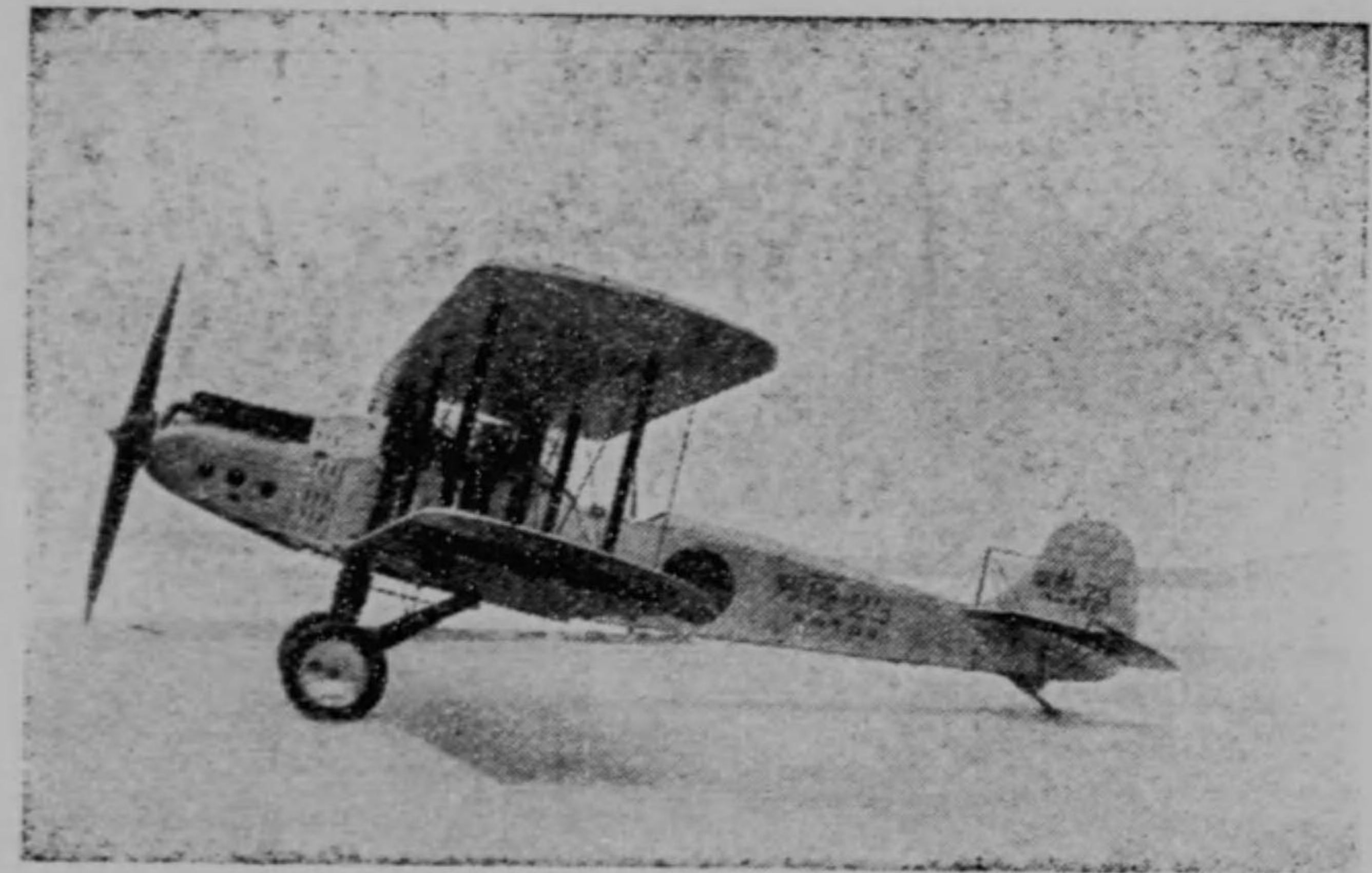
一三式艦上攻撃機



八九式艦上攻撃機



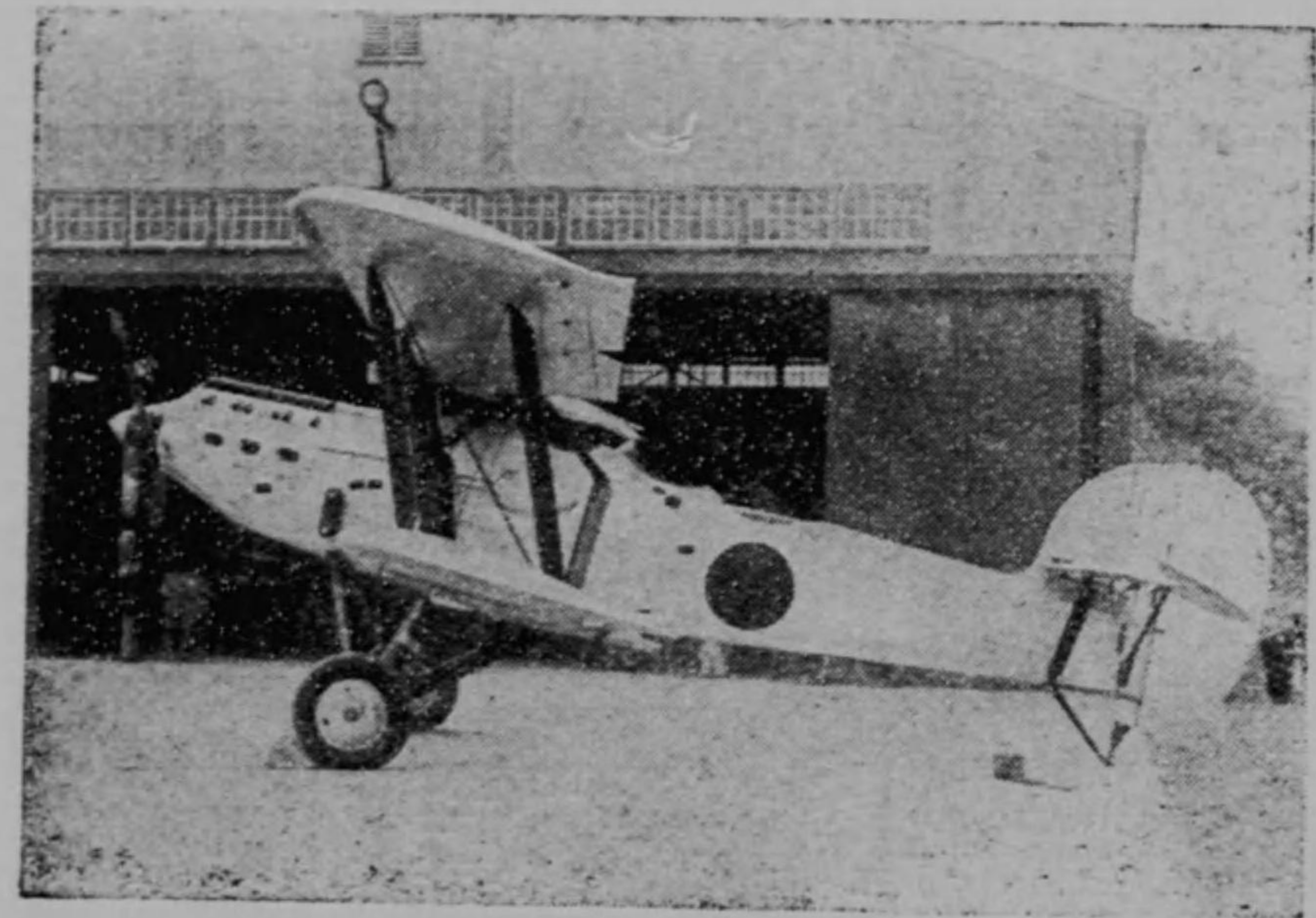
九二式艦上攻撃機



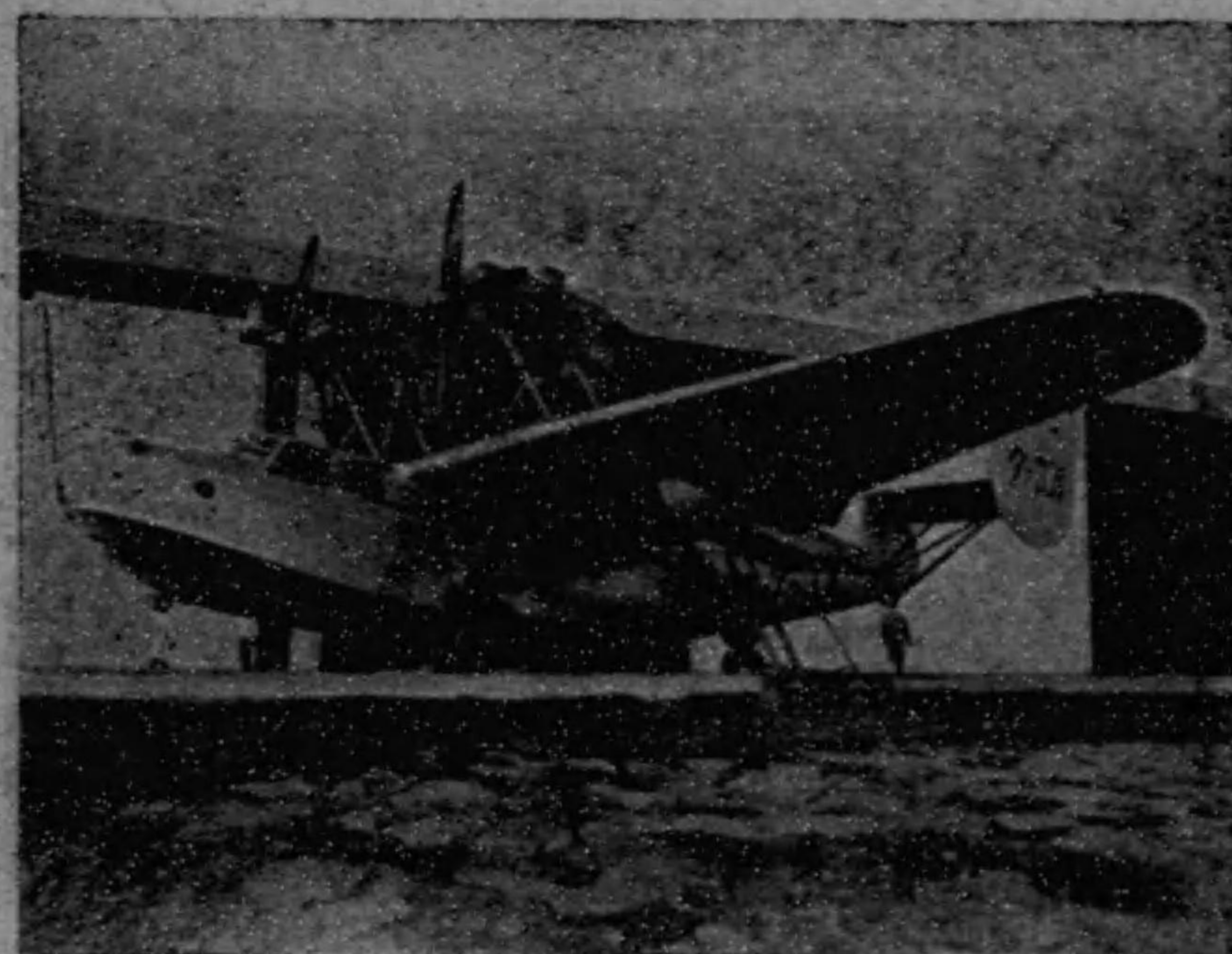
一三式艦上攻撃機



一五式飛行艇



八九式艦上攻撃機

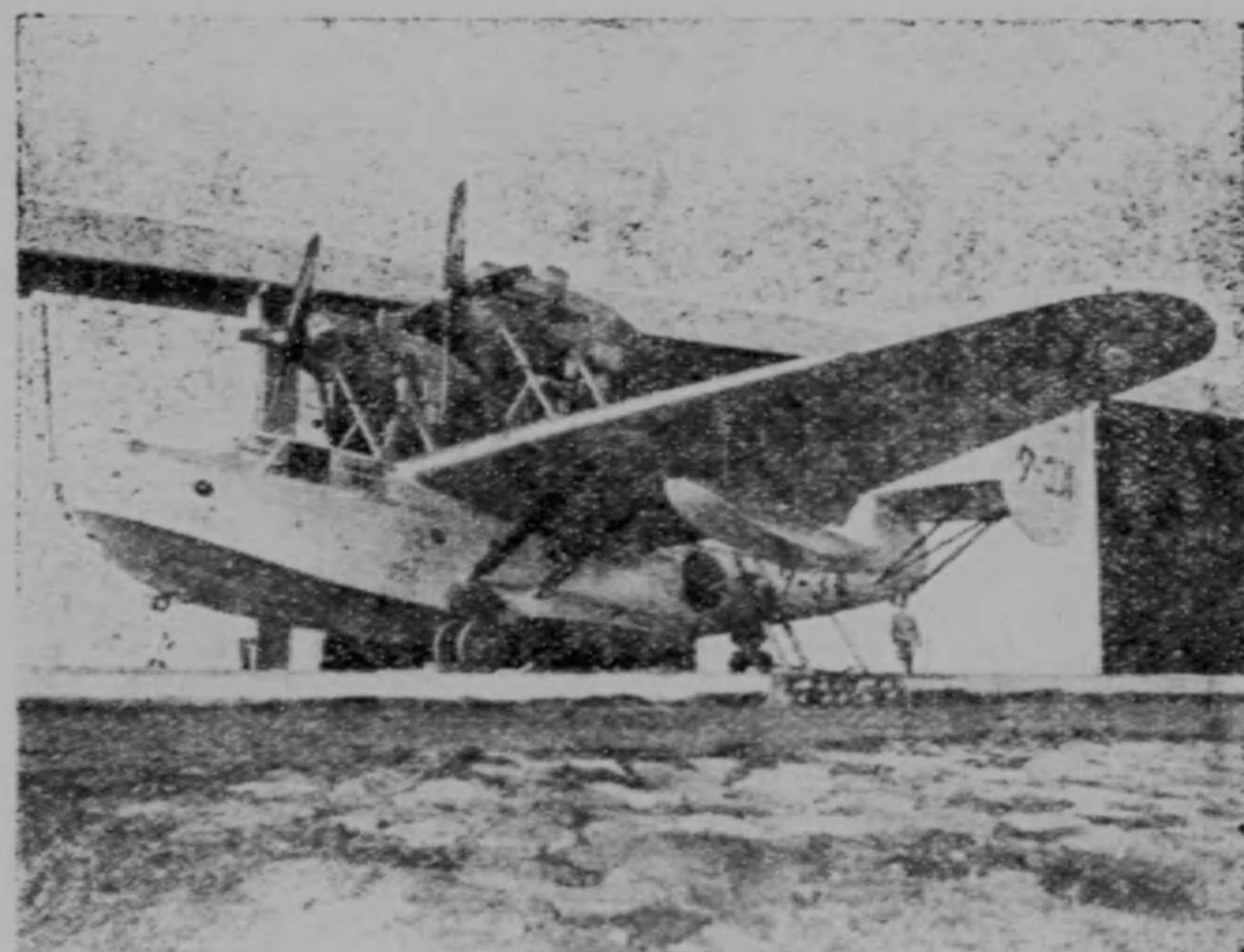


九一式飛行艇

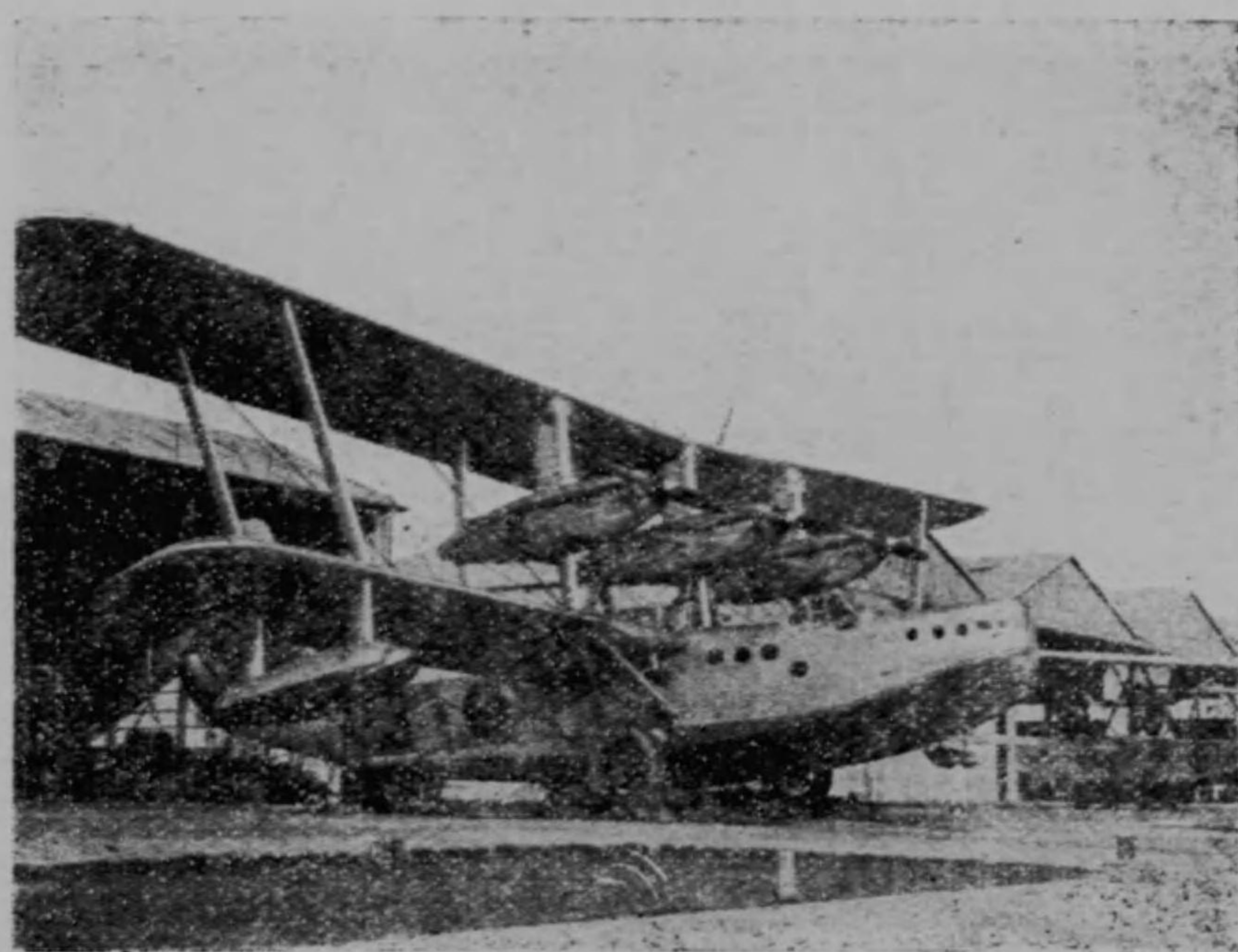


九〇式飛行艇

搭乗員の訓練の重要なことは、今更ら喋々を須るないところである。機材の進歩量の増大を期し得ても、畢竟これは死物である。使用するところの人にして技術拙劣なりとするならば何等の役も爲し得ない。また員數に於いてそれだけの機を運用し得る人數がなければ、同じく充分なる働きをなす譯には行かぬ。而して是等の搭乗員は何れも最も優秀にして而も立派な戦術眼を有し、機宜に適した判断によつて、見事に任務を遂行し、且つかゝる優秀な搭乗員を、豫め充分に保存して居ると云ふ場合に於いてこそ、はじめて眞の航空の威力が發揚せられるわけである。物は比較的短期間にこれを整備することは出来るが、人しかも斯くの如き精兵の養成は、實に長日月を要することも自から了解出来ることと思ふ。特に近來機材の長足なる進歩の結果操縦員の養成も昔時の如く簡単に急速には參らない。然るに毎年この優秀なる將士を多數犠牲に供せねばならぬのは、惜しみて餘りあることながら、非常時局を擔ふ皇國海軍



九一式飛行艇



九〇式飛行艇

搭乗員の訓練の重要なことは、今更ら喋々を須むないところである。機材の進歩量の増大を期し得ても、畢竟これは死物である。使用するところの人にして技術拙劣なりとするならば何等の役も爲し得ない。また員數に於いてそれだけの機を運用し得る人數がなければ、同じく充分なる働きをなす譯には行かぬ。而して是等の搭乗員は何れも最も優秀にして而も立派な戦術眼を有し、機宜に適した判断によつて、見事に任務を遂行し、且つかゝる優秀な搭乗員を、豫め充分に保存して居ると云ふ場合に於いてこそ、はじめて眞の航空の威力が發揚せられるわけである。物は比較的短期間にこれを整備することは出来るが、人しかも斯くの如き精兵の養成は、實に長日月を要することも自から了解出来ることと思ふ。特に近來機材の長足なる進歩の結果操縦員の養成も昔時の如く簡單に急速には參らない。然るに毎年この優秀なる將士を多數犠牲に供せねばならぬのは、惜しみても餘りあることながら、非常時局を擔ふ皇國海軍

の貴き犠牲として、諦めねばなるまい。

搭乗員諸君の平素覺悟の程は、洵に思ふだに感嘆を禁じ得ないものがある。一物の頼るべき物もない洋上を四方八方に翔け廻つて、而かも亦己の母艦に歸投することの如何に難事にして危険多きか、陸上の行動と同一視し難い幾多の難關が横はつて居る事故の發生は極力之れが防止の方策を講じ居るが、到底之れを絶無ならしむることは現状では出来ぬ。海軍搭乗員は平戦時の差別はない。従つて彼等は總べて常に最悪の場合に處するの覺悟を確然と有つてゐるのである。遺書に現はれたる字句を見ても、その立派なる覺悟のほどが窺はれるものあり、斯くあつてこそ始めて我が帝國の海上國防の第一線に任じ得べきものであることを、痛感せしめらるゝのである。

(七) 上海事變に於ける海軍航空部隊の活動につき竝に結言

軍事上特に海軍として航空機の重要性を増しつゝあること、又然るが故に各國共之が整備充實に鋭意努力を加へつゝあることは前述の如くであるが、航空なき又は航空の劣弱なる海軍は今日最早や眞の海軍と稱するに足らないのである。過般の上海事變に於ける我海軍航空部隊の活動は如實に海軍航空の大切なる所以を明示したることと思ふ。此の機會に其の一端を述べんに、昭和七年一月二十九日兩軍干戈を交ふるに至るや特務艦能登呂搭載の水上機は寡勢なる陸戦隊と協力して偵察に爆撃に至大の威力を發揮して當時の極めて危険なる情勢に即應したが、次で一月三十日航空母艦加賀の上海附近に到着するや翌三十一日その搭載十數機を以て上海上空に威嚇飛行を試みたことがため敵軍に與へた非常なる恐怖と他面在留邦人に與へた絶大なる慰安は洵に顯著なる事蹟とせねばならぬ。翌二月一日航空母艦鳳翔上海附近に到着後はこれ等航空母艦其の他に搭載の彗機は或は敵軍の所在兵力の搜索偵察に或は吳淞砲臺や敵の陣地等

の爆撃銃撃に寧日なく活動に活動を続け陸戦隊に對し又陸軍に對し寔に見事なる協同作戰を繼續して遂に三月三日敵軍の總崩れを見るに至るや敵の退路を攻撃し立ち直りの餘裕を與へざるの大功績を挙げたのであるが此の間二月五日同十九日同二十二日及同二十六日の空中戦闘は我海陸軍航空史上初めての出来事であり、又永久に記録すべき事項である。就中二月二十二日敵の蘇州飛行場上空に於て敵の米國製ボトイング戦闘機を墜し操縦者米國豫備陸軍中尉と稱するロバート・シヨートなる者を戦死せしめたること又二月二十六日早朝杭州笕橋飛行場を大舉襲撃して敵の五機を粉碎し折から反撃し來りし敵戦闘機五機と戦ひその三機を墜し更に進んで杭州海岸浦家村の新設飛行場に敵の數機を發見し之に猛射を加へ一機を完全に撃破し残る數機を奥地深く逃晦せしめ了りたるの偉功は特に大書すべき事蹟であつてかくして完全に征空權を我手に收め事後の作戰に寄與する所實に多大なるものがあつた。假に支那の航空兵力

がより優勢であつたか或は杭州にて殆んど壊滅に近き打撃を受けた敵飛行機丈けにても今少しく積極的の活躍を見せたとしたならば我が海軍航空部隊に對し乃至我陸上海上の部隊に對して或は案外なる實撃を加へ得たりしやも知れない。航空の大切なる此の一事を以てしても瞭々たるものがある。又之れに關聯して考ふべきは海上武力を以て充分に制海の實を擧ぐべきの一事である。敵地の真近に於て多數の艦船が行動し特にその航空兵力の中心勢力たる航空母艦が至近の地より優勢なる航空部隊を活躍せしめ得たことは一に敵に見るべき海軍がなかつたことに懸かるのである、地を替へて假に我海軍が將來に於て今日迄の如き威力なく敵が恣に我國土の至近の海面に殺到しその優大なる航空部隊を行動せしむるに至りしとせば如何。洵に慄然として膚の寒さを禁じ得ざる次第である、海防の大切なる寔に思ふべきである。然かも此の海防たるや之が同時に空防となるの實相につきては既に述べたる通である。滿蒙事變勃發以來大

陸發展の高調せらるゝは尤も千萬のことながら之が爲め大洋に發展を講ずることの重要度が減殺せらるゝが如きことは斷じてない「兩足を大陸に、而して兩手を大洋へ」斯くしてこそ初めて帝國の將來は洋々乎として希望に満ちたるものと申すべきである國民全體が國防につき又海軍に將又海軍航空につき充分なる理解と同情とを以て當事者に對し直接間接に有效なる激勵援助を送られんことを衷心より冀望して已まざる所であるが、幸にして近時海軍航空に對する理解、同情翕然として大いに國民報國の赤誠の結晶と謂ふべき、彼の報國號飛行機も約九〇臺に垂んとするに至つたのは洵に感激に堪へざる所であつて、是等の報國機に搭乗して國防第一線の重責に任ずる當事の將士は國民統後の力強き後援に勵まされつゝ、一意専心奉公の大節を盡し皇國大日本建國の大理想達成に向つて渾身の努力を致し居る次第である。

683
194

